

【いつか抱えきれないほどの向日葵を君に】

緞帳前。緑が立っている。

緑

あれからどれだけの時間が流れたんだろう。75年と2カ月までは覚えていてるけど、年数を数えることとは意味がないので止めてしまった。でも、たまにこうやって過ぎた時間の長さを考えることはある。僕はまだ此処に居て、ひまわりの種を植え続けてる。最近の嬉しいこと。やっと体の動きが鈍くなってきた。これなら僕が止まる日もそう遠くないだろう。そして・・・心残りなこと。僕はまだ緑を見ていない。真昼との約束が果たせないのは凄く心残りだ。・・・あれからどれだけの時間が流れたんだろう。僕はまだ此処に居て、ひまわりの種を植え続けてる。

音楽と共に緞帳が上がる。

真昼が鋤を持って畑を耕している。汗を拭きつつ空を見上げる。空は黒く厚い雲に覆われている。溜息をつく真昼。再び氣力を振り絞り鋤を振り上げる。

蛭田が上手から入ってくる。畑を耕す真昼を暫く見た後、声をかける。

蛭田

真昼ちゃん！やっぱここに居たのか！

真昼

あ、お疲れ様です！

蛭田 駄目じゃないか。ここに来るなら来るって俺に声をかけてくれなきゃ。見張りがいないと危ないんだよ？

真昼 すみません。蛭田さん疲れてるかなって思ってた。

蛭田 やっさすいゝなあ！大丈夫だって、真昼ちゃんが頼ってくれるなら多少の疲れなんてフツ飛ぶから！

真昼 でも、

蛭田 いいからいいから。見張りは任せて！愚猿が来たらすぐに教える。ただ、やっつけるとかは無理だから一緒に逃げようね！

真昼 はい、有難うございます！

蛭田 いいってゝ！真昼ちゃん見てるだけで俺は幸せなんだから！

真昼 私を見てたら見張りにならないですよ？

蛭田、「ニョホホホ！」と笑う。

蛭田 しっかし本当毎日よく続くね！藤堂さんにあれだけ理詰めで無理って言われたら俺だったら超凹むもん。マジリスペクトだよ！

真昼 誰が何と言おうと私は信じてますから。地球はまだまだ元気だって。

蛭田 だよねだよね、そーだよね！うんうん！

車の走行音。

少し高い所に道路があるのか、二人見上げる。

下手から上手へ首を動かし、移動する車を追う。

真昼

軍の車があんなに……。凄い量の荷物ですけど、食糧って結構潤沢なんですか？

蛭田

いや、あれは食糧じゃないよ。愚猿撲滅用のアンドロイドじゃないかな。

真昼

アンドロイド……。私、見たことないです！

蛭田

俺もない。でもほら、あの黒い袋の中に入ってるらしいよ。

真昼

強いんですかね？

蛭田

そりや強いでしょ。その為に開発されたんだし。

真昼

へへ。

真昼、暫く車を見ている。蛭田、真昼の横顔を見てニヤニヤする。

蛭田、真昼の肩に手を置こうとした瞬間、真昼が何かに気付き声を上げる。

真昼

あつ！

蛭田

えっ！？

真昼

一つ落ちました！

蛭田

ええ！？

真昼

こっちに転がってきます、ほらっ！

黒い袋が右に左に跳ねているのか、二人、揃えて首を上下左右に振る。

段々近付いてくるらしく、少し引き気味になる。直前になり悲鳴を上げながら逃げる二人。

下手から黒い袋が転がって来て、センターで止まる。

シーンとした間。恐る恐る近付く二人。

真昼、袋を指で突いてみたりする。袋は動かない。

真昼、いろんな角度から袋を見る。正面にファスナーがあることに気付き、開けようとする。

蛭田

いやいやいや！マズイでしょ！

真昼

こんなチャンス滅多にないですよ！？興味ありません？

蛭田

どうだろ？今興味とか言ってるられないくらいパニックってるからね、こっちは。

真昼

ちよつとだけ！ちよつとだけ見てみましょ？

蛭田

えゝゝゝ。。。

真昼、袋のファスナーを下ろす。

一体のアンドロイドが眠ったように目を閉じている。

真昼　これがアンドロイド？人間と全然変わらないんですね。

真昼、アンドロイドの頬を指でつつく。

蛭田　ちょっと何してんの真昼ちゃん！

真昼　人間みたい。これで本当に愚猿と戦えるんですね。

蛭田　どうだろう？え、人間って事はないよね？

真昼　やめて下さいよ！

蛭田　でもこれは人間そのものじゃない・・・？

二人、顔を近づける。

蛭田　息していない・・・。これはもうどっちかでしょ。

真昼　どっちかって？

蛭田　正真正銘のアンドロイドか・・・死体か。

真昼　やめて下さいよ！

蛭田　体温は？体温はどうだった？

真昼

指先でちよつとつittedただけなんで分かりません。

蛭田

だよ。そうだ、ここはもう現実逃避しかない！このままにして帰ろう！

真昼

嫌ですよ！折角ここまで耕した畑なんですよ！？

蛭田

なら明日からこつちを耕せば！

蛭田、 アンドロイドの体から上手を示す。

真昼

（アンドロイドを指さして）落ち着いて耕せません！

蛭田

だってしょうがないじゃない！

真昼

お願いします、蛭田さん移動させてください！

蛭田

無理無理無理！！

真昼

なら私がやります！

真昼、アンドロイドを動かそうとする。

蛭田

触らないほうがいいって！直ぐに軍に連絡すれば来てくれるからさ！

真昼

どのくらいで来てくれるんですか？

蛭田

2〜3日？

真昼 そんなに待てません！

蛭田 ダメだって！

真昼 もゝゝ動いてよ！せめて端っこに行つて！

蛭田 そんな無茶な！

真昼 無茶もウーロン茶ありません！ここは私が一生懸命耕した畑なんです！ひまわりを育てるんです！

蛭田 だよねだよね！

真昼 なのにこんな所で寝そべって作業の邪魔をするなんて許せません！もう、そのアンドロイド！いい加減に・・・起きなさいーい！！

ブンツという起動音。二人、その音に動きが止まる。

アンドロイドが上半身だけ起こす。

二人 動いた！

ア 初期設定をして下さい。

蛭田 ちよ、これガチでヤバイやつじゃない？ヤバイでしょ！ヤバイよね！俺、藤堂さんに報告してる！

真昼 蛭田さん！

蛭田、上手へ走り去る。

ア 初期設定をして下さい。

真昼 ……初期設定？

ア 音声を確認。声紋インプット。あなたの指示に従います。

アンドロイド、立ち上がり真昼の真正面へ。

ア モードを設定して下さい。

真昼 え？

ア 当機、シリアルナンバーT-1006Mのメインモードを設定して下さい。

真昼 あ、モードって？

ア 当機が行動するための判断基準です。当機には全36パターンのモードがインストールされています
順番にテスト確認することが出来ますが実行しますか？

真昼 えっと……はい。お願いします。

ア かしこまりました。一つ目は愚猿討伐モードです。通常はこちらのモードを選択して下さい。

キューインという音がする。

アンドロイド、右手を掲げる。

ア パワー開放率30%。テストに入ります。

アンドロイド、掲げた右手で地面にパンチをする。ドーンと轟音。

真昼 畑が……!!

ア 左右連打を実行します。

アンドロイド、両手を掲げる。

真昼 止めてください！

ア 指示に従います。

真昼 どうするんですか、折角頑張って耕したのに!!このモードは今後一切使用禁止です!!

ア 愚猿討伐モードを使用禁止に設定しました。次のモードをテスト。続いてはガンダムモードです。
真昼 え？

ア お楽しみ下さい。

キューーンという音。

ア 「ぶったね・・・二度もぶった!! 親父にもぶたれたことないのに!!」「それが甘ったれなんだ。

殴られもせず一人前になった奴がどこにいるものか」「自分のやったことに自惚れられない人は嫌
いよ」「悔しいけど、僕は男なんだな・・・アムロ、行きまーす!」

真昼 うん、じゃあこのモードで。

ア 音声を認識出来ません。

真昼 嘘でしょ。

ア 次のモードをテスト。続いては一人ルパン三世モードです。

真昼 普通なのありません?

ア 普通・・・当機には普通モードが存在しません。カスタマイズして新しいモードを作成しますか?

真昼 えーと・・・じゃあ、はい。

ア かしこまりました。それではどのようなモードを作成しますか?

真昼 どのようなって・・・。本当に普通でいいんだけど。あ、でも他人を気遣える優しい人がいいな。

誰かの幸せを自分の幸せに出来るような。あとは自分の感情とか意志に従って行動すれば良いと思
うよ。

ア かしこまりました。インプットします。

キューインという音の後に、ピピツという確定音。

ア 行動の判断基準を確立しました。メインモードに設定致します。設定者の名前を教えてください。

真昼 私？私は真昼。

ア 真昼……。設定者の名前をインプットしました。それでは最後に当機の名前を設定して下さい。
ええ！？

ア シリアルナンバーT1006M以外の名前を設定して下さい。

真昼 しまった！素直に質問に答えてたら戻れない所まで来てしまった！

ア 名前を設定して下さい。

真昼 えっと、今までの全部無かった事に出来ません？

ア 名前を設定して下さい。

真昼 だから、

ア 名前を設定して下さい。

真昼 容赦ない！

真昼、辺りをグルグルと逃げる。後を追うアンドロイド。

何度も「名前を設定して下さい」と言う。

真昼 分かった、分かりました！決めます！決めてやるんです！！飛びっきりの名前なんです！！

ピタッと止まるアンドロイド。

真昼 緑（りよく）！

ア リよく・・・。

真昼 漢字の緑（みどり）と書いてりよく！どう！？

ア 名前の設定を完了。これより当機は緑として正式稼働します。

真昼 ああ、しまった！今の無し！

アンドロイド、目を閉じる。キュイーンという音。

真昼 キュイーンっていつてるゝ！！

音、段々と小さくなり、やがて静寂。ゆっくりと目を開ける緑。

真昼 あ、あの・・・。

緑　　ありがとう真屋！

真屋　え！？

緑　「みどり」と書いて「りよく」！良い名前だよ！真屋は緑が好きなの！？

真屋　勿論！だからここでこうして畑を耕してるわけ。いつか本物の緑を見たいから。

緑　本物の緑か・・・。何植えるの？植物！？野菜！？

真屋　植物！の、ひまわり！

緑　・・・ひまわり？ちよつと待って。ひまわりを検索する。

緑、額に手を当てて考える。何かの起動音。

緑　ひまわりか。でもひまわりって緑より黄色い花びらの方が印象強くない？

真屋　かゝ、これだから素人は！いい？ひまわりがひまわり足りえているのは、あのブツ太い緑の茎があ

ってこそなんだからね！分かる！？

緑　分かる！じゃ、手伝う！

真屋　え！？

緑、近くにあった鍬を拾う。

緑 真昼一人で耕すのは大変でしょ。手伝うよ。

真昼 どうして・・・。

緑 真昼の喜びが僕の喜びだからね！

真昼 ああ！すっかり反映されてる！

緑 ここに千本のひまわりを咲かせよう！

緑、鋤を振りかぶり畑を耕そうとする。

真昼 スト〜ップ！

緑 何？

真昼 一度私の住んでる施設に移動しない？

緑 どうして。

真昼 私一人の時ならまだしも、今の緑じゃ愚猿が来たら危ないし。

緑 愚猿？・・・って何？

真昼 え？まさかカスタマイズモードってその辺のデータ全部飛んじやう感じ！？

緑 ねえ愚猿って何？

真昼 ・・・・緑！

緑 何！？

真昼 移動するよ!!
緑 分かった!!

真昼と緑、上手へ走り去る。
照明変化（施設の明かり）。
音楽。

下手から藤堂と美咲、後方上手から三上、後方下手から守と和泉が入ってくる。

藤堂 三上さん、周囲の様子は。

三上 変わりない。

藤堂 三階のシャッターは大丈夫ですか？

守 はい。

藤堂 二階は。

和泉 大丈夫です。

藤堂、首を守に向ける。

守 大丈夫です。確認しました。

藤堂　　そうですか。（和泉に）すみません。いつもの事とはいえ気を悪くしないで下さい。

和泉　　お氣遣い有難うございます。でも大丈夫ですよ。命に関わる事ですからね。

藤堂　　そう言ってもらえると助かります。（美咲に）そっちは？

美咲　　完璧です。

藤堂　　で、現在不在なのは・・・蛭田君と真昼君か。これもいつもの事だな。

美咲　　そうですね。

藤堂　　では各自ゆつくり休んでください。30分後には料理が出来るので食事は・・・23時まで済ませ

てもらえると助かります。

美咲　　今日はシチューにしてみました。

守　　それは温まりそうですね。

美咲　　美味しいといいんですけど。

和泉　　美咲ちゃんの料理はいつも美味しいから。

美咲、和泉の言葉にはあまり反応しない。

蛭田、上手から走って入ってくる。

蛭田　　藤堂さん！

藤堂　　どうした？

蛭田 さつき外ですね！

蛭田、報告を言いかけてピタツと止まる。

藤堂 蛭田君？

蛭田 いや、その・・・ちょっと待ってください。（三上の方を向いて）三上さん。
三上 ん？

蛭田 ちょっといいすか。

蛭田、皆とは少し離れた所に三上を呼ぶ。

三上 どうした。

蛭田 あ、軍の考え方について確認したい事が。

三上 そんな事、俺に分かるわけないだろ。

蛭田 でも三上さん、前は警察に居たんですよ？

三上 組織が全然違う。まして今は「隊」から「軍」に変わったんだぞ。

蛭田 そうかもしれないですけど、そーゆーのって似たり寄ったりじゃないですか。身内への甘さとか隠

ぺい体質とか。

・・・まあな。

俺、前に他の施設のヤツから聞いた事あるんですけど・・・軍が犯したミスを偶然知ってしまった男がいて、そのミスの発覚を恐れた軍が男は勿論、施設にいた全員を抹殺した事があるって。まさかとは思うんですけどそんなわけ・・・。

いや。無いとは言い切れないぞ。

え？

ミスの発覚を恐れるのは組織の常だからな。

そうですか。

何があつた。

それが、

蛭田君何かトラブルでも？

えっと、その・・・。

軍がらみらしい。

軍！？

真昼ちゃんの姿が見えないんですけど、まさか。

真昼と緑、上手から入ってくる。

真屋 遅くなりましたっ!!

藤堂 無事だったか。

真屋 すみません。心配かけちゃいました!

美咲 (緑を見て) その人は?

真屋 あ、この人は。

蛭田 真屋ちゃん!!

全員が蛭田を見る。

藤堂 どうした蛭田君。さっきから様子がおかしいぞ。

蛭田 その・・・。

美咲 それで、その人は?

真屋 あの・・・倒れてたんです!

守 倒れてた?

真屋 私がいつも畑を耕してる場所です。

守 大丈夫なのかい?

緑 僕? うん。

真昼

体は大丈夫みたいなんですけど、その、記憶が無いらしくて！そのままにしておけないと思って連れて来ちゃいました。

藤堂

まあ、それはそうだろうが・・・身元が分かりそうなものは所持してないのかい？

真昼

無いみたいです。

藤堂

それは困った・・・。

守

記憶をなくすって事は頭部に強い衝撃を受けたか、それだけの恐怖を体験したか。

和泉

あるいはその両方か。・・・愚猿に襲われたのかしら？

守

可能性は高いね。怪我してないか診てみよう。君・・・あ、そうか記憶を無くしてるから名前が分からないのか。

緑

名前ならあるって！漢字の緑と書いてりよく！

美咲

・・・何かしら。この微妙にかみ合っていない会話。

守

じゃあ、緑君。体を診させてもらうよ。

真昼

えっ！！

守

ん？

真昼

あ、いえ、何でもないです。

守

じゃあこっちに來て座って。

守、舞台後方にある椅子に緑を座らせる。

守、緑の頭部を確認しようとするが緑が手を掴む。

守
えっと、緑君？頭部に怪我がないか診たいんだけど。

緑、無言で睨む。

守
緑君？

真昼
緑！！

緑、真昼の声にパッと手を離す。守、頭部を確認する。

三上
犬だな。

守
頭部に外傷はないようだね。一応、心音も診ておこうか。

真昼、本心としては止めたいが、これ以上怪しい行動はしたくないので止められず葛藤し悶絶する。守、首にかけていた聴診器を耳に当ててチェストピースを緑の胸へ。2、3か所ほど場所を変えるが聴こえない。しばらく天を仰ぎ下を向いて考える。意を決して再び聴診器を当てる。心音は聴こえない。聴診器が壊れてると思ったのか、ダイヤフラムをトントンと叩く。爆音にビクツとする守。

和泉

何してるの？

守　　いや・・・。真昼君、彼は。

真昼　あ、あの、疲れてるみたいなんです、もう休ませてあげたいんですけど!!

美咲　ここで保護するんですか!?

真昼　皆さんにご迷惑はかけませんから!!

藤堂　真昼君。君は彼とさつき出会ったばかりなんだろう？

真昼　はい・・・。

美咲　どうしてそんなに信用出来るんですか？

真昼　え？

藤堂　本人を前にして非常に言いづらいんだが、彼が全て本当のことを言ってるという確証がない。何らかの疑惑があつて我々に近づき、記憶喪失のフリをしているだけという可能性もある。

真昼　そんな!!

藤堂　貴重な食糧や大切な武器など、奪われてから後悔するには損害が大きすぎるからな。

美咲　何かあったら全部真昼さんのせいになるんですよ!?

藤堂　流石にそこまでは言わないが、相応の責任を取ってもらう事になるだろう。余計なリスクを背負うことは無いと思うが。

美咲　食糧だって緑さんの分を賄うだけの余裕はありませんし。

真昼

私の分を分けますから大丈夫です。

守 それはちよつと医者として聞き逃せないな。真昼君はただでさえノルマ不足で与えられている食事

が少ないんだ。さらに減るとなると健康面で影響が出るのは明らかだからね。

真昼

明日からちゃんとノルマ達成させますから。

美咲

あの、お二人は前から知り合ひなんですか？

真昼

え？ううん。

美咲

（怪しむように）じゃあ何でそんなに肩入れするんですか？

緑

ちよつと待った！真昼が責められるのはおかしいでしょ。

美咲

（慌てて）別に責めてる訳じゃ！

緑

それに何より、人が人を助けるのにどうしてそんなに消極的なのか分からないんだけど。

三上

・ ・ ・これはまた随分甘い考えだな。記憶を無くすと危機感まで無くなるのか。

緑

どういう事？

藤堂

しかしまあ、今の発言で彼が悪い人ではないことは分かったかな。

美咲

え、どうしてですか？

和泉

緑君の状況や立場に関わらず、自分が助かるために怒ったわけじゃないから、かな。

美咲、和泉の話を聞いているのか聞いていないのか分からない反応。

藤堂

さて、緑君の「どういう事？」に答えようか。君は今、世界が特殊な状況にあることは理解しているかな？

緑

特殊な状況？

藤堂

・・・では目を閉じて。

緑、怪訝そうな顔をする。

真昼

緑。

緑、目を閉じる。

藤堂

「外の風景」を頭の中でイメージして欲しい。まずは「都会の風景」・・・イメージ出来たかな？

緑、頷く。

藤堂

では次に「田舎の風景」・・・こちらもイメージ出来たかい？

緑、頷く。

藤堂

では目を開けて。今、君がもし乱立する超高層ビルや舗装された道路を歩く人々、緑の生い茂った森、きれいな青空や眩しい太陽をイメージしたなら……それは全て23年前に存在していたモノだ。

緑

……え？

藤堂

残念ながら今の日本……いや、地球上のどこに行ってもそんな風景は存在しない。

緑

(真昼に) そうなの？

蛭田

お前だってここに来る間に見て来たら。破壊されたビル、荒れた道路、真っ黒な雲に覆われた空!!……逆に一本でも見たか？木や草を。

和泉

そういうイメージをしたって事は少なくとも緑君は27歳以上ってことかしら。

守

戦争後の世界しか知らない美咲君と真昼君は緑や太陽を見たことないからね。

緑

……一体何が？

和泉

人間はね、三度目の大きな過ちを犯したの。

守

きっかけはある独裁国家の内戦に諸外国が介入した事だった。政府側と反乱軍側にそれぞれ大国がついてね。

和泉

中立を保つ国も少なくなかったけど大国の圧力が強くて……。いろんな国が巻き込まれていったの。日本もその国のうちの一つ。

守

世界が大きく2つに分かれてからしばらく膠着状態が続いたんだけど、逆にそれがマズかったのかな。いっどんな攻撃が飛んでくるか分からない恐怖はドンドン大きくなって……それに我

慢でできなかった一つの国が核を使用してしまったんだ。

一度核が使用されたらもう歯止めがきかなくて・・・三度目の大戦は最初の核が使用されてからたった45分で終結したの。

政府は機能しなくなり、代わりに実権を握ったのが自衛隊だった。自衛隊は軍に組織変更して外国の動きを牽制しつつ治安維持、食料品の管理、居住スペースの確保を行った。

この小学校も軍が改造してくれたの。愚猿からの攻撃を防ぐにはかなり強度のあるシャッターが必要だったから。

なんで小学校に？

生きてる人間が少ないのにバラバラに生活したら軍が管理しきれないだろ。対愚猿用のシャッターだって無限にあるわけじゃないんだから。それくらいちょっと考えれば分かるだろ！

当初は動きが素早くて助かったが、今では独裁的な管理下のもと、与えられた食料で何とか生活してるってわけさ。

俺達がどれだけギリギリの生活してるか分かったか？

まあ。（藤堂に）さっき「大切な武器」って言ったよね？戦争はもう終わったんじゃないの？戦争はね。だが、我々には身を守らなければならぬ新たな敵が現れた。

新たな敵・・・？

突然、大きな雄叫びが聞こえる。（周りの愚猿の生の声と録音した声でボリュームを出す）

驚く緑。怯える真昼・美咲・和泉。

藤堂 確認する。全ての階のシャッターは？

守 閉めました！

美咲 閉めました！

守 2階も大丈夫です！

三上、全員の前に来て刀を構える。守も刀を取り出す。蛭田は刀を抱きしめて震える。
雄叫び、徐々に小さくなる。

藤堂 行ったか？

三上 おそらくな。

緑 今のは？

藤堂 新たな敵さ。愚猿と呼ばれている。

緑 愚猿・・・。

守 今の地球上では人間の数より彼等の方が多いだろうね。・・・僕達通常の人間は軍から支給されている放射能の影響を抑える薬がないと外で活動できないけど、彼等は今の劣悪な環境にも適応してるんだ。

緑 そんな化け物がウロついてるわけ？
蛭田 化け物とか言うなよ！

蛭田、緑の襟を掴む。三上、蛭田の手を取り、緑から離す。

三上 お前の言う通り奴等は化け物だ。万が一出くわしたらさっさと逃げるんだな。だがもし戦うことになったら・・・躊躇なく殺せ。

蛭田 三上さん！

美咲 そういえば緑さん、刀は支給されてないんですか？男性は常に帯刀を義務付けられてるはずですけど。

真昼 た、多分何らかのトラブルに巻き込まれたときに失くしちゃったんだと思う！

藤堂 さて、こちらの事情を理解してもらったところで彼の処遇をどうするかだな。流石に今すぐ出て行ってもらうわけにはいかないとしても、明日以降の事を決めるべきだと思うが。

真昼 せめて記憶が戻るまではここに！

美咲 でもそしたら当分の間食料も薬も一人あたりの分配量が減るんですよ？それで誰かに何かあったらどうするんですか。

守 しかし彼をこのままにしてはおけないと思うが。

和泉 事情を説明して軍に任せるのが一番現実的じゃない？

守 そうだね。

蛭田 ニヨホホホ！

藤堂 どうした蛭田君。

蛭田 その、軍に任せるって言うのは・・・。

三上 ・・・・なるほど、コイツは軍が絡んだヤツって事か？

蛭田 どうしてそれを！？

三上 さっき俺に相談してたのはそういう事だろ。

蛭田 しまったゝゝゝ！！

藤堂、三上を見る。三上、藤堂が気付いたことに気付きうなずく。

藤堂 軍にとってよろしくない事を知る者には死を、か。そういう事なら軍に相談するのは無しだな。分

配量が減ってしまう分は作業ノルマを多くこなして支給される食事の総量を増やすしかないですね。

緑 作業ノルマって？

真昼 今、軍が進めてる計画で、人間の住居空間を地下に移すっていうのがあるんだけど。

緑 人間が地下に！？

蛭田 それだけ愚猿つてのがおっかねえ存在ってことだ。

緑 だって人間が地下で生活するなんてどう考えても無茶でしょ。

蛭田

無茶とか言っつてんじゃねえよ！・・・無茶とか言うんじゃねえよ。

藤堂

軍から各施設にノルマが与えられててね。達成率に応じてもらえる食糧の多さが変わるんだ。

守

掘れば掘っただけ人類の新天地に貢献した事になるからね。

蛭田

勘違いするなよ？飯に今までの倍のノルマこなしたって一人分の食糧になる訳じゃねえんだからな

緑、何らかの違和感を感じて全員を見る。

美咲

明日から真屋さんは今まで以上に頑張らないとですね。今までみたいに「私はご飯そんなにいらな
いから」って作業サボってる場合じゃないですよ。

真屋

別にサボってるわけじゃ・・・。

藤堂

とはいえ他の人よりも作業が進んでいないのも事実だ。植物を見てみたいという真屋君の気持ちも
わかるが、今後はもう少し作業の時間を増やして欲しい。

緑

それなら大丈夫でしょ。僕が手伝うし。むしろ一日のノルマは早く終わらせられるんじゃない？

蛭田

お前が手伝うのは当たり前だっつーの！！

藤堂

期待している。

緑

任せて！！

守

藤堂さん。軍が来た時は緑君どうします？

緑、守を見る。

和泉 二週間に一度、生存者の確認と作業の進捗確認、あと食糧の配給に軍が来るの。

藤堂 どこかに隠れてもらうしかないだろうね。軍が来ている間、緑君は出てこないこと。その間僕一人？それは暇だなあ。

緑 待て。

真昼 分かった！

藤堂 さて、あと他に決めておく事は・・・。

美咲 ああ。

藤堂 ん？

美咲 緑さんが過ごすのって真昼さんと同じ教室なんですか？

蛭田 はあ！？そんなわけないだろ！！

藤堂 そうなのかい？

真昼 そうですね。流石に別で。

緑 え！！？そうなの！？

真昼 別！！

緑 分かった！！

藤堂 まあ、幸い教室はたくさん空いてるからな。

緑　　そういえば他の人達は？

藤堂　他の人達？

緑　　七人しか居ないんで。

守　　いや、ここに居るのは七人だけなんだ。

緑　　そうなの！？何で？

守　　元々は三百人居ただけだね・・・、今は七人だけなんだ。

蛭田（緑に）それ以上質問すんなよ。知らないからって何を聞いても良いわけじゃねえんだからな。

緑　　そうなの？

三上　記憶を無くしたからといって氣遣いくらいは出来るだろう？

緑　　大切！！氣遣いと優しさは大切！！成程、氣遣いってそういう事か。

美咲　・・・あの、氣のせいかな緑さんって記憶喪失というよりは何も知らない子供みたいなんですけど。

藤堂　とりあえず緑君の教室は真昼君の隣で良いだろう。他の細かい事は明日以降、氣づいた時に決めていこう。

美咲　そうですね。皆、作業でクタクタですから。

藤堂　緑君。君は我々の信用の上でここに滞在できる事を忘れないように。裏切り行為は勿論、問題を起さないようにな。

藤堂、下手後方にはけて行く。美咲、チラッと緑と蛭田を見て藤堂の後を追う。

三上、無言で上手後方に去ろうとする。

緑 よろしくっ！

三上 女に守られてヘラヘラするな。

真昼 三上さん、これには事情がありまして。

・ ・ ・ ここで暮らすことは構わないが、一つだけ条件がある。俺に話しかけるのは必要最低限にし
ろ。

三上、上手後方に去っていく。

緑 あの人お腹空いてるんじゃない？

和泉 あ、そうそう。藤堂さんが今日は11時までに食事を済ませてくれて。

真昼 ありがとうございます。

和泉 じゃ、緑君。これからよろしく。疲れてるだろうから自己紹介は明日ね。

緑 よろしく！

（真昼に）いつかは事情を話してくれるのかな？蛭田君も知ってるようだけど・ ・ ・。出来れば真
昼君から聞きたいと思ってる。

真昼 ・ ・ ・ はい。

守 緑君、何かあったら相談してね。微力ながら力を貸すよ。

緑 おお！良い人！真昼、この人良い人！

真昼 だね！

守 そんなにストレートに言われると照れるね。・・・じゃあ。

守、和泉、下手に去っていく。

蛭田、真昼の近くに移動。

蛭田 真昼ちゃん。ちょっといい？

蛭田、真昼を縁から遠ざけて。

蛭田 その・・・俺が離れてから・・・アイツと何かあった？

え？

蛭田 美咲ちゃんも言ってたけど、どうしてそこまでアイツの面倒を見ようとするのかなって。

私の軽はずみな行動で彼を起こしちゃったんです。どうすれば良いのか分かりませんが、ちゃんとしなきゃって思ってます。

蛭田 もろろ！真昼ちゃんは真面目だなあ！そういうトコ本当いいよね！でもさ、軍本部の場所教えてそ

真昼
ここに行ってもらえば解決じゃない？アンドロイドなんだから歩いて行けるって。
それがダメなんです。私が愚猿討伐モードの使用を禁止して、普通の人として活動するように指示
しちゃったから・・・。

蛭田
ええ！？マジで？

真昼
はい。・・・もう死んでお詫びします！

蛭田
いやいやいや！待って落ち着いて！・・・じゃあもしかしてアイツ、自分がアンドロイドだってい
う自覚がない感じ？

真昼
多分・・・。

蛭田
これはなかなかヘビーな状況だね。

緑
真昼！

真昼
何？

緑
暇！遊ぼう！

蛭田
今、大事な話をしてるんだっつーの！

緑
なら僕も交ぜて。

蛭田
お前に関する話にお前が交ざってどうすんだよ。

緑
僕の話！？いいね！何を話す！？

蛭田
だから来んなって！

緑
真昼！こいつは意地悪なヤツだぞ！

蛭田 こいつじゃない、俺には蛭田という素敵な名前があるんだ！

緑 おお蛭田！僕は緑だ！

蛭田 ああ！イライラする！

真昼 あの、蛭田さん。彼の事なんですけど、少しの間だけ様子を見させてもらえませんか。お願いします！

蛭田 あのね、真昼ちゃん。

真昼 はい。

蛭田 以前から言ってると思うけど、僕は真昼ちゃんの事が好きなんだ。

真昼 ・・・・はい。

蛭田 真昼ちゃんの事をずっと見てきた。そんな俺だから真昼ちゃんは何を考えてるか分かるつもりなんだけど。・・・アイツが軍に戻れば強制的に再起動させられて、今度こそ愚猿討伐用のアンドロイドとして起動させられる。今、普通の男として生きてるアイツをそうさせたくないんでしょ？

真昼 蛭田さん・・・。

蛭田 真昼ちゃんの言う事きいてあげたら少しはポイント稼げるかな・・・。

蛭田、真昼が少し困ったような顔をしたのを見て、

蛭田 なーんつつてね！男、蛭田裕也、そんなセコい事は言わないって！！じゃ、また後でね。食堂で。

真昼 はい。ありがとうございます!!

蛭田、緑に近づき、

蛭田 勘違いするなよ？お前を認めたわけじゃねえーからな。

蛭田、真昼に再び「じゃ」と言って上手後方に去る。

緑 僕、あんまり歓迎されてない感じ？

真昼 皆、余裕がない中で生活してるから・・・ゴメン。

緑 なんで真昼が謝るの。

真昼 だって・・・。

緑 僕が早く記憶を取り戻せば皆に迷惑かけずに済むかな。

真昼、元氣なく下を向いてしまう。

緑 そんな顔しないで。

真昼 え？

緑 全部思い出しても畑を耕すのは手伝うから。二人でひまわりを咲かせよう!!

真屋 ……うん。ありがと! 頑張ろう!!

緑 あれ? でも真屋って緑を見たことないんだよね? 何でひまわりが好きなの?

真屋 フッフッフ…それはね、…もう遅いから明日のお楽しみ!!

緑 楽しみ!!

真屋 じゃ、まずは緑のお布団とか用意しなきゃね!!

真屋と緑、二人で話をしながら下手に去っていく。

暗転。音楽。明かりがつく。(畑の明かり) 真屋と緑が立っている。

真屋 二人だと作業があつという間に終わっちゃったね。

緑 皆の分も少し手伝ったから、これで堂々と耕せる!!

真屋 うん!! ありがと!!

緑 でも、さっきの作業と何が違うの?

真屋 さっきのは地下を作らなきゃいけないから土を掘ったけど、これは土を柔らかくする為の作業。土が柔らかくないと植物の根が伸びないから。

緑 成程!

真屋 (客席側を指さして) あの青い看板のお店…あそこは元々お花屋さんだったみたいで、種が大

量においてあったんだ。お金払ってないけど。鋤は小学校の用具室にあったし。種も道具もあったらまず耕すでしょ！

緑
分かる!!

真昼
一度でいいからさ。一目でいいから……この目で緑を見たいなって。そしたらこの憂鬱な空の下でも生きていけるような気がして……って何かオバサンみたいだね。

緑
オバサン!!

真昼
嘘でしょ。

緑
とにかく畑を耕す。種を植える。ひまわりが咲く。真昼生きる!!そういう事でしよう?任せて!!

緑、鋤を構える。

真昼
でも大丈夫?疲れてない?

緑
全然大丈夫だよ!!作業だって本気出してないし。

真昼
え?

緑
皆何であんなに動きが遅いんだろうって思ってたんだよね。今なら真昼しかいないし僕の好きなように動いていいんでしょ?

真昼
う、うん……。

緑
畑をたくさん耕して種をたくさん植えたら、それだけ真昼の夢が叶う確率が上がるんだよね?

真昼

うん。

緑

そしたら真昼、笑ってくれるよね!!

真昼

うん!!

緑

(緑、笑顔になる) よーし、頑張るぞー!!

音楽。緑と同じ衣装を着たキャストが上手、下手から現れる。

鍬をもって緑と一緒に畑を耕し始める。

音楽に合わせて動く事。大勢だが緑一人が動いてるように見せる。

音楽のフェードアウトと共にキャストが去る。

舞台上には緑と真昼。

緑

ざつとこんなもん!?

真昼

スゴイ!! 畑を耕すというよりは何かの基礎工事みたい!!

緑

皆もサボらずにこの位動けばいいのね。そしたらノルマなんて早くこなせるのに。

真昼

ええ・・・っと、まあそうなんだけど、ホラ、その辺は軍が管理してるから、早く進めればいいってモノじゃなくてね。

緑

・・・そうなの?

真昼

だから緑も皆と居る時はペースを合わせてくれると嬉しいかな。

緑 分かった!!

真昼 ああ、なんだろう。ドンドン自分が汚れていく気がする。

上手後方から三上と蛭田が入ってくる。

蛭田、真昼と緑が楽しそうに話してるのを見つけて、

蛭田 真昼ちゅわーん!! やっぱここに居たんだー!! さーがーしーたーよ!!

走って真昼の近くへ。緑を掴んで離れさせる。

三上 一人でここに来るなと何度も言ってるはずだ。

真昼 すみません。でも今日は緑がいたので。

三上 ・・・その犬が飼い主を守れるとは思えないが。

緑 だから僕は犬じゃないっての!!

三上、耕されている畑を見渡す。

真昼 どうかしました？

三上 随分進んだんだな。

真昼 はい。緑が手伝ってくれました!!

三上 いや・・・継続する意思の力さ。真昼はもつと自分に自信を持ってい。

緑 真昼を呼び捨てにするなー!!

蛭田 ブーメランって知ってるか?

三上 だからこそもつと自分の身を守る事に気を使え。お前に何かあったらこの畑はどうするんだ。

真昼 ・・・そうですね。

三上 (遠くを見渡して)で、どうだ最近は。この辺りでヤツ等を見かけたりはしてないか?

真昼 はい。ここ一週間は見てません。

三上 そうか・・・。

緑、真昼と三上の間に割って入ってくる。

緑 はい、はいはいはい!!

真昼 どうしたの!?

(三上に) あんたさ、向こうの穴掘りの作業場に居なかったよね!? 真昼、こいつはおサボリ野郎だぞ!! 悪い子だぞ!!

蛭田 バカ、三上さんは!!

緑 何!?

真昼 三上さんは、私達が作業場に着く頃にはもうノルマを終えて自由行動してるの。

緑 は!? だって僕達あんなに早い時間から行ったんだよ!?

真昼 うん。だからそのずっと前から作業してるの。

緑 何の為に。

真昼 私達を愚猿から守る為。

三上 俺はそんなつもりはない。

蛭田 でも何だかんだ言って俺達の事を気にかけてくれるじゃないですか。

三上 俺は愚猿を狩る為に時間を作っているだけだ。

真昼 はい。でも・・・私達が助かっているのは事実ですから。感謝してるんです。

三上、真昼を見ていたが急に視線を外す。

蛭田 照れた。

緑 ・・・・ねえ、真昼。あの人、愚猿に恨みでもあるの?

真昼 さあ、その辺の事は何にも話さないから・・・。

緑 ふーん・・・。

真昼 どうしたの?

緑
別に・・・。

美咲が上手から走って入ってくる。

美咲
皆さん、大至急戻ってください!!

三上
愚猿か!?

美咲
いえ、軍から連絡があり、もうすぐ来るそうです。

真昼と蛭田、顔を見合わせる。

三上
この間来たばかりだろ。

美咲
いえ、視察とかではなく極秘に話があるとか。

三上
(緑を見て) こいつか。

美咲
藤堂さんが対応してくれていますが、軍が言うには全員揃っていて欲しいそうです。
三上
分かった。

三上、蛭田、上手へ走り去る。

美咲
緑さんは申し訳ないんですけど、近くまで移動したら軍が帰るまでどこかで待機してもらってもいいですか？

緑、真昼を見ている。

美咲
あの、緑さん？

真昼
（美咲を見ていたが緑の視線に気付き）どうしたの？
緑
真昼はあの三上ってヤツに何か特別な気持ちがある？

美咲
え、そうなんですか？

真昼
無い無い無い!!どうしたの急に。

緑
スゲー頼ってるみたいだから。

美咲
そりゃあ三上さんは私達を何度も愚猿から守ってくれてますからね。真昼さんだけじゃなくて皆頼ってると思いま、聞こー？話してるのこっちー。

緑、美咲が話していても真昼を見ている。

真昼
緑・・・怒ってる？

緑
何か嫌だったから。

美咲 あ、成程。緑さんは嫉妬してるんですね。

緑 嫉妬？

美咲 ヤキモチ。

緑 何か・・・イライラする。僕が真昼の事守れば僕を頼ってくれる？

美咲 あれ？もしかして私、今、ものすごい胸キュンシーンに立ち会ってます？

真昼 そんなんじゃないありません!!とにかく、緑は危険な事しちゃダメ。分かった!?

緑 分かった!!

美咲 返してー!!私の胸キュン返してー!!

真昼 さ、私達も早く戻りましょう!!

真昼、緑、美咲、上手へ走り去る。

照明変化。(施設の明かり)

下手から藤堂、守、和泉、兵士Aが入ってくる。

藤堂 ご覧頂いた通り何もありません。納得してもらえましたか？

兵士A 答えは部下が戻ってからだ。

部下B、上手後方から、部下C、下手後方から入ってくる。二人、兵士Aに敬礼。

兵士 B 二階、対象物ありません!!

兵士 C 三階、対象物ありません!!

守 じゃあこれで、

兵士 A 結論は全員から話を聞いてからだ。

守 誰に聞いても同じですよ。私達は一緒に暮らしてるんですから。誰も匿ってませんし、何も隠していません。そもそも一体何を探してるんですか。

兵士 A 機密事項だ。

守 そんな! 私達はプライベートの時間を削って協力してるんですよ!! それに、何を探しているのか分からなきや、この後何かを見つけても報告のしようがないじゃないですか。

兵士 A 今後何か異常な物を見つけたら、どんな物であろうと軍に連絡すればいい。それで? 他の者はどうした。

藤堂 今、呼びに行ってます。あと2・30分程で到着するかと。

兵士 A、面倒くさそうに場所を変更して待機する。

藤堂

ところで先程の件ですが・・・ノルマを今の倍、達成させたら食糧の配分を1.8倍にして頂ける話。了承してもらったと解釈してよろしいでしょうか。

兵士 A そんな話は後にしろ。

藤堂 ですが先程あなたは「分かった」と。

兵士 A そんな事は言っていない。

兵士 B の携帯が鳴る。続いて兵士 C の携帯が鳴る。兵士 B、電話に出る。

兵士 B はい、お疲れ様です。現在 F 地区におります。いえ、今のところ発見できておりません。はい。あ、変わります。副隊長!! 隊長が変わってくれとの事です。

兵士 A、電話を変える。

兵士 A 変わりました。いえ、申し訳ありません。各エリアの全ての人間から話を聞いておりますとどうしても時間が、え? いや、それは・・・待ってください、それでは確認に漏れが出てきます。・・・隊長!!・・・了解。(兵士 C に) G 地区との連絡は?

兵士 C 今、取れました。一時間以内に来るなら対応出来るそうです。

兵士 A 隊長、今から G 地区へ移動します。ご指示通り今日中に K 地区までの確認を終えます。報告は後程。では。

兵士 A、携帯を兵士 B に渡して、

兵士 A 隊長命令だ。今日中に K 地区まで搜索を終わらせる。(藤堂に) 最後にもう一度確認するが・・・
本当に何も隠し事はないんだな？

藤堂、兵士 A の言葉には反応せず、視線をそらす。

兵士 A ・・・分かった。倍のノルマを達成出来たら 1.8 倍の食糧分配を約束する。

藤堂 ええ。我々は誰も匿ってませんし、何も隠しておりません。

兵士 A もしそれが嘘だった場合、お前の命で清算することになるがその覚悟があつての発言なんだろうな。
藤堂 覚悟も何も事実ですから。

兵士 A、軽く舌打ちする。

兵士 A 行くぞ。

兵士 A、上手に去る。兵士 B、兵士 C も後に続いて去る。
守、和泉、藤堂の近くへ。

守 大丈夫なんですか。あんなに言いきってしまつて。

藤堂 ですが、これでノルマさえ倍クリアすれば食糧の問題はなくなりました。

守 しかし万が一、緑君の事が軍にバレたりしたら!!

藤堂 その時はリーダーの私が責任を取ります。

守 藤堂さん。

藤堂 どうしたんですか。私をリーダーにしたのは皆さんですよ？

守 それは・・・。

藤堂 失礼。言い方が適切ではありませんでしたね。他意はありませんので気にしないで下さい。

守 責任を取らせる為に藤堂さんをリーダーにした訳ではありません。な？和泉。

和泉、ボーっとしている。

守 和泉？大丈夫か？

和泉 え？ええ。何？

藤堂 守先生、和泉さんを少し休ませた方が・・・。

上手から美咲、蛭田、三上、真昼が走って入ってくる。

美咲 藤堂さん!!

藤堂 すまない。遠くまで使いを頼んで。

蛭田 さつき軍の車とすれ違ったけど、全員に用があるんじゃないんですか？

藤堂 いや、話はもう終わった。

守 やっぱり緑君を探しているようだったけど、藤堂さんがうまく誤魔化してくれたよ。

美咲 さすが藤堂さん!!

守 で、その緑君は？

真昼 向かいの民家に隠れてもらってます。呼んできましたか。

藤堂 ちょっと待って欲しい。真昼君、彼は一体何者なんだ？

真昼 え？

藤堂 忙しいはずの軍が三人体制で搜索に当たっている。余程重要な人物かと思ったが、なんだか物扱いに話しているのが気になってな。

真昼 ・・・彼は・・。

蛭田 昨日言った通り、倒れてたのを発見しただけで俺達も分からないんですよ!!

藤堂 しかし、

三上 藤堂。・・俺はあいつの正体に興味はない。どうしても知りたいなら個別に話してくれ。だが・・

知る事によってより深みにハマる事だっと思うがな。

美咲 あ、私も知らなくて大丈夫です。

藤堂、全員の様子を見て、

藤堂 ・ ・ ・ 分かった。皆がそれで良いのなら私もこれ以上の詮索はしない。

真昼 あの、じゃあ、もう呼んでもいいですか？

藤堂 ああ。

真昼、上手に向かって、

真昼 よし！！

緑 真昼ー！！

緑、走って上手から入ってくる。

蛭田 何処居たんだよ！！

緑 話は終わった？

真昼 うん。

藤堂 軍に嘘をついてまで匿ったんだ。穴掘り作業は限界まで頑張ってもらおうよ？

緑 任せて!!

蛭田 緊張感のない奴だな。本当に分かってんのか？

和泉 ねえ、守さん。

守 ん？

和泉 皆は面識あるようだけど、あの方は？

緑 え？

和泉 初めまして。天野和泉です。何か事情があるようだけど、ここの人達は皆良い人ばかりだから。安

心して。

緑 えっと・・・あれ？

緑、困惑して真昼を見る。どう答えて良いか分からない真昼。

美咲、大きなため息。和泉、美咲の反応を見て、

和 守さん、私また・・・。

守 大丈夫。大丈夫だから。

突然ガシャーンとガラスの割れる音。

美咲 何!?

藤堂 食堂の方からだ。美咲君、シャッターは降ろしたのか!?

美咲 え、あの、私・・・。

愚猿の雄叫び。三上以外、怯える。

三上 愚猿か!!

三上、下手へ走り去る。

藤堂 (守に) すぐに三上さんを追って下さい。蛭田君も!

守 分かりました!!

和泉 無茶しないでね!!

守 大丈夫。行ってくる。

守、走って下手へ去る。

藤堂 どうした、蛭田君。

蛭田 いや、皆行っちゃうと万が一の時に誰も女性陣を守れないかなって思ってた!!

藤堂 (緑に) 君が代わりに行くか？

緑 それで真昼が守れるなら!!

蛭田 だからって刀は渡さねえから!!

藤堂 愚猿と争う必要はない。あくまでサポートを頼む。

緑 任せて!! (真昼に) 行ってくる!!

真昼 緑!!

緑、真昼の方を振り返った後、力強く頷き、下手に走り去る。

藤堂 美咲君は三階のシャッターを、真昼君は二階のシャッターの確認。それが終わったら一番奥の教室で待機。和泉さんは私と一緒に来て下さい。蛭田君は後方を警戒しながらついて来て欲しい。

真昼 あの時!!

藤堂 どうした？

真昼 食堂のシャッターを降ろす人が必要だと思います!! 愚猿が次々に入ってきて来たらいくら三上さんだって!!

藤堂 そうだな。危険な役だが頼めるか？二階の確認は私が行く。蛭田君は和泉さんと一緒に移動してく

れ。

真昼
分かりました。

蛭田
はい!!

蛭田、和泉と一緒に上手後方へ去る。藤堂と美咲、下手後方へ去る。真昼、下手へ去る。
照明変化。

愚猿の雄叫び。上手から愚猿が入ってくる。辺りを徘徊。
下手から三上が入ってくる。愚猿を見渡す。

三上
・・・ヤツは居ないか・・・。

守が下手から入ってくる。

三上
先生は怪我をしない様、守りに徹してくれ。

守
はい。私が余計な事するよりやりやすいでしょうからね。

三上
付き合いが長いと話が早くて助かるな。・・・さて、消えてもらおうか。

音楽。

三上と愚猿の殺陣。守は愚猿が下手に行かないようにガード。

一匹の愚猿が守の方へ。必死に戦う守。

複数の愚猿と戦う三上。一匹の愚猿が三上の背後から攻撃しようとした時、下手から緑が入ってくる。

緑
三上!!

三上、緑の言葉と同時に後ろにいた愚猿を攻撃。

三上
犬の世話になる程弱くはない。

緑
だから僕の名前は!!

と、言いかけて隣で守が必死に愚猿と戦っているのを見る。

守 緑
・・・大変そうだね。

すっごくね!!

下手から真昼が入ってくる。

緑 真昼!?

三上 何しに来た!!

真昼 シャッターを降ろします!!緑、手伝って!!

緑 分かった!!

三上 愚猿を誘導する。タイミングを合わせて一気に抜ける!!

真昼 はい!!

三上、「一、二の三!!」の掛け声。

三上と愚猿、後方を下手側に移動。真昼と緑は前方を上手へ移動し、すれ違う。

一匹の愚猿が上手の方へ。真昼を攻撃しようとする。

三上 真昼!!

愚猿の爪が真昼の体に触れそうな瞬間、緑が素手で受け止める。

三上 何!?

緑 大丈夫!?

真昼

ありがとう!!

緑

でも、どうしよう。ここから何かできる気がしない!!

三上

そのまま押さえてろ!!

三上、緑の押さえていた愚猿を斬る。

真昼

緑、シャッター降ろすの手伝って!!

三上

待て!!

三上、守と戦っている愚猿の方へ。左手を斬る。

愚猿、振り向く。刀を突きつける三上。そのまま上手の方へ誘導。

三上

ボスに伝えろ。「今度はお前が来い」と。

愚猿、後ずさりして距離をとる。そして上手へ去る。

真昼と緑、シャッターを降ろすマイム。

三上

先生、怪我はないか？

守
はい。指示通り守りに徹しましたからね。

三上、緑を見る。

緑
何？

三上
お前は何だ？何故愚猿の爪を素手で受け止める事が出来る？

緑
・・・え？

緑、自分の手を見る。

藤堂、美咲、蛭田、和泉が入ってくる。

藤堂
今、愚猿が一匹逃げて行った様ですが。
三上
俺の判断だ。

藤堂
皆を危険に巻き込む事は慎んで下さい。
三上
俺にも俺の事情がある。

藤堂
それは承知の上で言っています。

三上、無言。藤堂、三上の顔をしばらく見て、諦めたようにため息。

矛先を美咲に向ける。

藤堂 美咲君。食堂のシャッターは君の分担だろう。

美咲 え？いや、あの、違うんですよ。その・・・言いくいんですけど、今日はたまたま用事があって代わりに和泉さんをお願いしたんです。

和泉 え？

美咲 いや、何か本当すみません。

藤堂 そうなのか？

和泉 ・・・・私、・・・ごめんなさい。覚えてないです。

シーンとする。周りの様子を見て、和泉、必死に、

和泉 すみません！！私のせいで皆さんを危険な目に合わせてしまいました！！すみません！本当にすみま

せん！！

守 大丈夫だよ。大丈夫。・・・藤堂さん。

藤堂 分かっています。

美咲 いえ、謝るのは私の方です！！和泉さん、病気なのに頼んだ私が悪いんです！！責めるなら私を責め

て下さい！！

藤堂 確かに。今回の件に關しての発端は美咲君にある。反省の必要があるね。

美咲 ・・・はい。

守 とはいえ、何事もなく済んで良かったですね。緑君も活躍してくれたし!!

緑 活躍? 僕は何も出来なかった!! 今の僕じゃ真昼を守れない。三上!! 僕に戦い方を教えて欲しい!!

守 刀を持ってないのに無茶だよ。

藤堂 刀なら蛭田君。君のを渡したまえ。

蛭田 俺のを!?

藤堂 大事に抱えていても役に立たないからね。

緑 ちよつと待った。僕は真昼が守りたいだけなんだけど。

藤堂 構わないさ。我々が真昼君のそばにいれば同じことだろう? (蛭田に) これは命令だと思つてもら

いたい。

・・・渡したら俺はもう愚猿と戦わなくていいんですよね?

藤堂 当然だ。

蛭田、刀を緑に渡す。

蛭田 俺の刀を渡すんだからな。守るべき最優先は真昼ちゃんだぞ。

緑 分かった。三上!!

三上

断る。

緑

どうして!?

藤堂

彼を鍛えれば戦力になるかもしれません。そうすれば、

三上

断る。

藤堂

三上さん。

三上

俺が自分の命と引きかえにするなら、この辺り一帯にいる愚猿共を皆殺しにすることが出来る。そして、そうすることが出来れば俺は自分の命など惜しくはない。だが今までそうはしなかった。何故か分かるか。

藤堂

・・・いえ。

三上

藤堂がリーダーになった時、俺に言っただろう。皆を守って欲しいと。お前はよくやっていると。だから俺は指示に従っている。だがな、愚猿に関する事だけは俺に指図するな。

三上、上手後方に去る。

蛭田

緑

(緑に) おい、何とかして必ず戦い方を教えてもらえよ?
分かってる・・・。

藤堂

とはいえあの感じでは今すぐと言うのは無理だろう。真昼君、彼に学校内を案内してあげたらどうだ?

真屋
藤堂 はい。丁度連れて行こうと思つた場所があるので！
例のところか？

真屋、笑顔になる。

緑 よし、行こう！

真屋と緑、下手後方に去る。美咲、少し追うくらい二人の背中を見送る。
蛭田、面白くなさそうな顔。美咲、蛭田に近付く。

美咲 蛭田さんって何でそんなに真屋さんの事が好きなんですか？

蛭田 ・ ・ ・ 真屋ちゃんが何でひまわり咲かせたいか知ってる？
美咲 え？いえ。

蛭田 もう何年前になんのかなあ。この学校にまだ百人くらい人がいた時だから ・ ・ ・ 十年くらい前か。
真屋ちゃんがさ、ひまわりの造花を拾つて来た事があつたんだ。

守 ああ！あつたねえ。懐かしいな。

蛭田 作りもんなんだけど皆喜んでさ。食堂に飾ろうつてなって、飯食う時はひまわりの近くの席奪い合
いになりましたよね。

守 うん。あの時は本当、癒された。

蛭田 でも造花つってもやっぱり物には寿命があるんだよな。段々黄色の花びらが落ちてって、茎も曲がっ

ちやって・・・逆にそれ見てたらテンション下がるとか言って大人が勝手に捨てやがってさ。シ

ヨックだったと思うよ。

美咲 すみません。それ長くなる感じですか？

蛭田 お前が聞いたんだろうが！とにかく、真昼ちゃんは造花を捨てられたショックよりもみんなが笑っ

てくれた喜びの方が大きかったらしくて、それなら本物を見せたらもっと笑ってくれるだろうって、

今でも畑を耕してるわけだ。

美咲 ・・・・で？

蛭田 分かんねーの？このギリギリの生活を強いられる世界で誰かの為に頑張れるってスゲー事じゃん！

スゲーじゃん！もう好きになっちゃうよね！超好きだよ！好きだよ！

美咲 ならですよ？

蛭田 何？

美咲 正直言ってやっぱり邪魔とか思ったりします？

蛭田 何が？

美咲 緑さんの事。

蛭田 ・・・・そりゃあ・・・。

蛭田、言いかけて口を閉じる。美咲から目をそらし、下を向く。

美咲

はいはいはい。うんうん。そーですか。ふーん、なるほど。

美咲、一人納得して下手に去る。

蛭田、周りの視線に気づき、ポツリと話す。

蛭田

そりゃあ俺を見て欲しいとは思う。でも真昼ちゃんが幸せになれるなら、相手は必ずしも俺じゃないかなって。振られたからって人の不幸を願うほど人間腐ってないつもりですよ。俺は。

藤堂

・ ・ ・ 蛭田君、どうやら我々は君の事を少し誤解していたようだ。

蛭田

振られたうんぬんは例え話ですからね！

守

よし、今日は飲もう！

蛭田

その感じやめてもらえますか？

藤堂

今日くらいたくさん飲みたまえ。

蛭田

例え話ですって！

守、蛭田を「まあまあ」と言いながらなだめる。

和泉、藤堂の近くに移動。

和泉

あの、本当にすみませんでした。私がシャッターを閉め忘れたせいで皆さんを危険な目に合わせてしまいました。

藤堂

・・・本当に頼まれていればの話ですが。

和泉

え？

藤堂

何でもありません。さ、飲みましょう。

藤堂、和泉、守、文句を言う蛭田をなだめつつ上手へ去る。

照明変化。(図書室の明かり)

下手から真昼と緑が入って来る。真昼の手には一冊の本。

緑

おお！スゴイ本の数！ここ本屋じゃないんでしょう？

真昼

うん。

緑

ちよつと待って。

緑、脳内で検索するポーズ

緑

図書館！

真昼 おいしい！図書、室。

緑 図書室！

真昼 校舎の中の一室だからね。

緑 真昼かしこい！

真昼、得意気な顔。緑、真昼の本に気づいて

緑 何持ってるの？

真昼 見たい？

緑 見たい！

真昼 ジャーン！

真昼、本をパツと前に出す。

緑 おお！植物図鑑！

真昼 これのねー、

真昼、パラパラとページをめくる。途中のページで手が止まる。

真昼

ここ！ホラッ！

緑

（ページを見て）おお！！向日葵！！成程、これを見たから緑とか向日葵とか知ってたんだ！！

真昼

作り物の向日葵なら見た事あるしね。

緑

へー！見たい！

真昼

もう無いんだ……。枯れちゃったから。

緑

作り物なの？

真昼

……。そうだね。枯れちゃったとは言わないか。壊れちゃった。

真昼、何かを考えるように下を向く。

緑

……。真昼？

真昼

ねえ、やつぱりさ、向日葵無理かな。作り物の向日葵すら存在出来ない世界で、本物の向日葵を咲

かせるのはやつぱり無理だと思う？

緑

うーん……。それってさ、「青空はもう無いのかな？」って言ってるのと同じ事のような気がするけど。

真昼

だって青空は、

緑

あるよ？

真昼

え？

緑

青空はあるよ。黒い雲に邪魔されて見えないだけで。あの雲さえ無くなればまぶしい太陽とキレイな青空が見えるはずでしょ。

真昼

うん。．．．じゃあ、

緑

地面だってちゃんとあるんだから。今は土が元気ないだけで、肥料を与えて栄養がたまれば絶対向日葵を咲かせられる。明日あそこのお花屋さんに行って肥料を探そう。

真昼

お金払わないけど。

緑

お金払わないけど。

真昼

．．． ありがと。緑ならそう言ってくれと思った。

緑

皆だって同じ事言うよ。

真昼

んー、どうだろ。．．．でも少なくとも畑を耕すの「手伝う」って言ってくれたのは緑が初めてだった。

緑

そうなの？

真昼

まあ、そんな余裕が無いのも確かかなんだけどね。

緑

それもあるだろうけどさ、．．． 多分、努力するのが恐いんじゃない？頑張って努力して、その結果が報われないのが恐いんだよきっと。ん？結局余裕が無いって事と同じか？

真昼

ううん。緑の言葉の方がより正解に近いと思う。．． 努力が報われない事が恐い．．．か。そう言われたら確かにちよっと恐いかも。

緑

え？

真昼

大丈夫!! 楽しみな気持ちは恐い以上にこれだけあるから!!

真昼、両手で大きく円を描く。

緑

うん。明日も頑張ろう!! 穴を掘って畑を耕して、みんなに努力を見せてやろう!!

真昼

あ、緑。

緑

何？

真昼

私が緑を助けたりかばったりしたのは畑を耕すのを手伝ってもらう為じゃないからね。

緑

どうしたの急に。

真昼

別に・・・ただ誤解されるのは嫌だったから。

緑

そんな風に思ったりしないよ。それに僕的には同じだし。

真昼

同じ？

緑

真昼が僕を必要としてくれるならどんな理由であろうと嬉しい。

真昼

(笑って) 緑は本当に真つすぐだね。

緑

真昼だってそーじゃん。ニコニコしちゃって。

真昼

え？ 私今ニコニコしてた？

緑

してた。

真昼

えー、してた？

真昼、両手で頬をおさえる。その仕草に緑も笑う。

緑
ねえ、真昼。これだけの本があるなら、正しい植物の栽培方法が書かれた本もあるんじゃない？肥

料の与え方とか。

真昼
うわー普通に考えればそりゃそうだ！！

緑
探してみよう！！

真昼
うん！！まずはあっちから！！

二人、上手へ走り去る。暗転。

藤堂、美咲、蛭田、舞台へ移動。

明かりがつく（出入り口付近の明かり）美咲がふてくされて藤堂に文句を言っている。
上手後方から真昼と緑が入って来る。

真昼
おはようございます。

藤堂
おはよう。

真昼
あれ？守先生と和泉さんまだ来てないんですか？珍しいですね。

藤堂

昨日飲み過ぎてましたからね。

美咲

もー、それなら何で誘ってくれなかったんですか!!

蛭田

自分が先に部屋に戻ったんだろ!!それに美咲ちゃんの分はもうとくに飲んじやったでしょ。

美咲

そこは男の蛭田さんが私に少し回すべきじゃないですか。

蛭田

何でだよ!!

三上が入って来る。

真昼

あ、おはようございます。

三上

今日は遅いんだな。

蛭田

守先生と和泉さんが来てなくて。

美咲

二日酔いで遅刻とかどうなんですかねえ。

三上

許してやれ。

守が下手から入って来る。軽く頭をおさえている。

守

遅れてすみません。

美咲

つらそうですね。大丈夫ですか？

守 強くないのに結構飲んでしまいましたからね。

美咲 いいなあ。

守 今度飲むときは私の分、少し飲んでもらえますか。

美咲 え、いいんですか？

守 むしろ助かります。(和泉の姿が見えない事に気付き)・・・和泉は？

藤堂 まだ来てません。

守 先に行つてると言つて部屋を出たんですが・・・。

藤堂、守、ハツとする。守は下手を見る。藤堂素早く指示を出す。

藤堂 女性陣は女子トイレの確認。男性陣は各階の廊下の確認を。誰がどこを担当するかは移動しながら決めて下さい。

各自、「はい」「分かりました」等の返事をして動こうとした時、下手後方から和泉入って来る。全員止まる。

守 和泉。

守、ホツとして和泉に近付こうとするが、様子がおかしい事に気付き止まる。

守 (優しく語りかけるように) どうした？

和泉 パパ、優人見なかった？

守 ・ ・ ・ え？

和泉 あの子最近作業さぼってばかりでしょ。パパからもきつく言ってね。

守 ・ ・ ・ ・ ・ うん。分かった、言っとく。

和泉 もう、いつもそう言ってて小言言うのは私の役目なんだから。

守 ゴメン。今度はちゃんと言うから。

和泉 お願いね。で、あの子はどこかしら？

守 ・ ・ ・ ほら、あれだよ。子供たちは健康診断を兼ねた社会見学に行つてる。軍の施設に。

和泉 社会見学？

守 昨日見送つたじゃないか。

和泉 そう？ ・ ・ ・ そうだったかしら。

守 そうだよ。皆一緒に見送つたんだから。

藤堂、真昼、美咲、蛭田、三上、人それぞれのうなずき。緑も合わせてうなずく。

和泉
・
・
・
そう
・
・
・
・
・
○

和泉、ふと顔を下げた瞬間、大声を上げる。ピタッと止まって守の方を向く。

和泉 何で嘘つくの？

守 嘘なんてついてないよ。

私は優人を見送った事なんてない。ねえ、あの子はどこ？

和泉、言いながら降りて来て守の前へ。

守
い
ず
・
・
・
マ
マ。

あの子はどこ？どうして誤魔化するの？答えなさいよ！！

守 本当なんだよ。あの子は今、

和泉 嘘つかないで!! 私は見送った事なんて一度もない!! あの子はどこ!!

美咲 和泉さん、優人君は、（死んでいることを伝えようとする）

守（美咲の雰囲気を感じて）ママが忘れてるだけだよ。昨日ママは疲労で倒れたんだ。だから、
和泉いい加減にして!!

和泉、守の体を掴んで乱暴に倒す。その後、守の背中等を殴りながら

和泉

あの子はどこ？どこにやったの？言いなさいよ！！どこにやったの？私の優人をどこにやったのよ！！（以下、あの子はどこ等のセリフ繰り返し）

見かねた緑、止めようと動くが

守

大丈夫だから！！

緑、その言葉に止まる。守、和泉の両手をゆっくり取る。

和泉、最初は抵抗していたが、次第に力が抜けてくる。

和泉

．．．．あの子はどこ？

守

．．．．本当なんだよ。優人は今、社会見学に行ってる。

和泉

私、あの子に会いたい．．．．。

和泉、うずくまって泣いてしまう。

緑 真昼、あの人は・・・。

真昼 守先生と和泉さんには優人君って男の子がいたんだけど・・・十年くらい前に殺されたの・・・愚猿に。

緑 え？

蛭田 作業場から二人で帰ってる時にいきなり現れたらしい。大切な息子が自分の目の前で殺されたんだ。

どれだけシヨックな事かは分かるだろ？

藤堂 知識のない我々には一概に判断出来ないが、心因性の記憶障害が出ている。

緑 記憶障害・・・。

緑、脳内で検索。理解したのか真昼を見る。

美咲 記憶喪失の緑さんと似たようなものですな。

蛭田 またそういう事を!!

美咲 (必死に取り繕って) 私は別に変な意味で言ったわけじゃないですから!!

和泉、ゆっくりと上半身を起こす。

和泉 優人。・・・優人。・・・優人ー。優人ー。

和泉、探すように「優人」と呼びかける。

守

見ないでやって下さい。．．．見ないで下さい。．．．見ないで下さい！！

和泉は宙を見つめたまま、小さな声で「優人」とつぶやく。

藤堂

．．．今日の作業は中止にします。美咲君と近くの部屋で待機しますので何かあったら呼んで下さい。（美咲に）行こう。

守、無言でうなづく。藤堂と美咲、下手に去る。

蛭田

じゃ、俺も近くにいます。

蛭田、下手に去る。

緑

あの、僕何か出来る事．．．

守

二人にしてもえませんか。

緑 でも・・・。

守 お願ひします。

真昼 守先生。

守 ・・・・お願ひします。

三上 真昼、犬。行くぞ。

緑 行くつて、このまま放つて行けるわけないだろ!!

三上 お前は氣遣いを大切にしてるんじゃないのか？

緑 そうだよ、だから!!

三上 放つておく氣遣いもあるんだ。相手が望まない以上、これから先はお前の自己満足になる。

緑、守の背中と宙を見つめる。和泉を見てうなだれる。

三上 氣が変わつた。犬、今なら戦い方を教えてやる。

緑 え？

三上 真昼を守れる力が欲しいんだろ？今すぐなら教えてやるが・・・どうする。

緑、守と和泉を見た後、真昼を見て、三上を見る。

緑 教わる！

三上 刀を持って来い。校庭に集合だ。

緑、うなずく。緑と真昼、上手の階段から昇り、下手へ移動し下手後方へ去る。

三上、上手後方へ去ろうとした時

守 三上さん。．．．．．ありがとう。

三上、一瞬立ち止まり、そのまま無言で去る。

守、和泉の背中に向かって、

守 久しぶりに。パパって呼ばれたね。僕も久しぶりにママって呼んだよ。．．．僕達は本当に優人を見

送った事があるんだよ。二泊三日の社会見学。ママは一週間前から落ち込んで。当日になったら

「私も一緒に行く」とか言い出してさ。．．．優人が一番困ってたよ。ママがあんまり寂しがるもん

だから僕まで寂しくなっちゃって。夜、二人で泣いたよね。．．．十五年前の事なんだ。でもその前

は。．．．十三年前の事を忘れてた。そうやって色んな事、忘れちゃうのかな。僕達が夫婦だって事

も。．．．だとしたら残されてる時間ってあとどれくらいあるんだろ？その時が来たら今更ママの事

を和泉さんって呼ばなきゃいけないのかな。．．．それは嫌だなあ。

和泉
・ ・ ・ その時は、
守 え？

和泉、守の方を向いて

和泉
その時はひっぱたいてもいいから思い出させて。
守 和泉。

和泉
・ ・ ・ ゴメンなさい。

守
謝らないで。和泉は何も悪くない。

和泉
そうじゃないの。そうじゃなくて、優人の事。

守
優人の？

和泉
・ ・ ・ 私に覚悟が出来たら、いつか必ず話す。

守
待ってる。さ、皆の所に行こう。

和泉
うん ・ ・ ・

守
大丈夫だよ。普段は医者である僕の助手として、和泉の方が皆を助けてるんだから。こういうのは堂々としたもん勝ちなんだ。

和泉
勝ち負けなの？

守
そ。勝ち負けなの。

守と和泉、話しながら下手に去る。

照明変化。(校庭の明かり)

下手後方から緑と真昼。上手後方から三上が入ってくる。

三上

刀は持ってきたか？

緑

ここに。(階段を降りながら)で、何から始める？やっぱり素振り？

三上

強くなりたいなら実践あるのみだ。負けて自分に何が足りないのかを学べ。

緑、構えた後、三上に突進。かわす三上。刀の先を緑の首元へ。

三上

寸止めはこれで最後だ。次は打ち込む。

少し離れて再び相對する。一呼吸おいて緑、突進。三上、かわして刀を振り上げる。

三上、峰打ちながら刀を緑に当てる。緑、衝撃で膝をつく。

真昼

緑!!

真昼、緑に駆け寄ろうとするが三上が刀で制する。

三上

それくらいで膝をつくな。今すぐ強くなりたいなら立て。

緑、立ち上がる。

三上

随分動きが遅いが・・・まさかこの俺に気を使ってるんじゃないだろうな？

緑

僕は全力だったの。

三上

だとしたら尚更問題だ。いいか。ただ刀を振るのではなく殺意を込めろ。

緑

殺意？

三上

どんな名刀も殺意のない攻撃では骨を切断することは出来ない・・・犬。銃という文明の武器があるのにもかかわらず、何故俺たちが刀で愚猿に挑むか分かるか。

緑

え？いや・・・。

三上

愚猿の再生能力は正しくバケモノだ。銃で穴をあけた位ではすぐに回復してしまう。奴等の息の根を止めたいならバズーカで肉片にするか・・・。

緑

刀で切断するか。

三上

・・・理解出来たか？

緑

成程・・・。斬るではなく、断つか。意識を変えなきゃいけない事は理解出来た。

三上
なら・・・来い。

緑、一呼吸して気合を入れた後、三上に挑もうとした瞬間、蛭田がニコニコしながら入ってくる。
緑、三上、ズルッ。

蛭田
真昼ちゅわ〜ん!!

蛭田、真昼に近づいて、

蛭田
和泉さんの意識が戻ったよ。

真昼
そうなんですか!?! 良かった・・・。

蛭田
で、藤堂さんが今日はいつそ作業を休みにしようって。

真昼
確かに。その方が良くかもしれないですね。

蛭田
明日からかなり頑張らないといけないけどね。(緑に聞こえるように) 誰かさんのせいで倍のノルマ達成させなきゃいけないからなー。

真昼
蛭田さん。

蛭田
(キザに) 俺、頑張るからさ。真昼ちゃんにひもじい思いはさせないぜ。

真昼
ありがとうございます。でも、私も頑張るんです!!

緑はずっと真昼と蛭田を見ている。

三上、緑がよそ見している様子をみて、

三上
おい。

蛭田 そんな真昼ちゃんに明日への活力!!はいっ!!

蛭田、ポケットからチョコを取り出す。

真昼
チョコ!!

蛭田 あげる。

真昼 いいんですか!?!甘い物は貴重なんです!!

蛭田 大丈夫。ちゃんと俺の分配分だから。

真昼 ええ。蛭田さんだって好きなのに。

蛭田 俺は真昼ちゃんの喜んでる顔の方が好きだからいいの。食べたくない?

真昼 食べたいです!!

蛭田 じゃあ、はい。

真昼 ありがとうございます!!いただきます!!

緑、刀を蛭田の方に向ける。

三上
おい。

真昼
美味しいです!!

蛭田
もっとゆっくり食べなよ。それは真昼ちゃんのなんだから。・・・ほら、口の端にチョコがついてる。
えっ!?!どこですか!?!

蛭田
俺が取ってあげようか。

真昼
大丈夫です。大丈夫です!!

緑
真昼に触るなー!!

緑、蛭田に攻撃しようとする。三上、受け止める。

緑
あんたも真昼狙ってるのか!?

三上
お前はアホか。

緑
真昼につ・・・!!

緑、刀に力を込める。押される三上。

三上
コイツ!?
緑 近づくな!!

緑、何度か三上を攻撃。受け止める三上。

三上、逆に一撃を加える。後方に下がる緑。刀を構え直す。

三上
やれやれ……。 (真昼と蛭田に) 二人、ちょっと。

真昼と蛭田、三上の近くに。三上、蛭田にくつつく。

蛭田
ちょ、三上さん何すか!?

三上、蛭田から離れる。

三上
おい、犬。…… (真昼に近づいて) ピトッ。
緑 あー!!

緑、怒って三上に突進。三上、蛭田と真昼を遠ざけて緑の攻撃を受け止める。緑、雄叫びを上げながら刀を振りきる。三上、後方へ飛ばされる。

三上　こいつは嬉しい誤算だな。真昼。

真昼　はい。

三上　気が変わった。あいつを徹底的に鍛えていいか？

真昼　え？

三上　俺にも事情があつてな。俺自身、今より強くなる必要がある。あいつを鍛えれば少しは役に立つかもしれない。

真昼　何で私に？

三上　飼い主に許可を取るのは当然だろ？

緑　だから犬扱いするなつての!! 真昼、任せて!!

真昼　でも、あんまり無茶は・・・。

緑　大丈夫。僕、強くなるから。

三上　その気があるなら死ぬ気で来るんだな、犬。

緑　僕の名前は緑と書いてりよく! 一本取れたら名前を呼んでもらう。それと・・・三上の過去も・・・話してもらおう。

三上　(鼻で笑って)・・・始めるぞ。

音楽。二人の特訓シーン。

真昼と蛭田は上段に上がる。

藤堂、三咲、守、和泉も下手上段から入ってきて真昼や蛭田と会話している様子。

特訓の最後に緑、三上を攻撃。一本取れたかと期待するが、一瞬早く三上の刀が緑の腹部をとらえていた。悔しがる緑。

再度、手合わせしようと離れ、お互いに袈裟斬りですれ違ったところで暗転。

照明変化。（出入り口の明かり）

藤堂がファイルを持って立って、何かを考えている様子。蛭田が下手から入ってくる。

どうしたんですか？

蛭田君か。今、食糧庫に行って在庫を確認して来たんだが・・・。

藤堂、蛭田にファイルを見せる。蛭田、ファイルをパラパラとめくり、見る。

貴重食糧が予定数より減っている。三百人で生活していた時ですらこんな事は無かったのだが。

なら犯人は一人しかいないじゃないですか！！緑ですよ、緑。

可能性で言えば記憶障害のある和泉さんという事も考えられる。あまり疑いたくはないが、しばら

蛭田　く二人の動きはチェックしよう。
どうします？皆にも話します？

藤堂　・ ・ ・ そうだな。自ら犯人ですと名乗り出るとは思わないが、反省してくればそれに越した事はないからな。

蛭田　ですね。

藤堂　私がつとちゃんと管理していれば良かったのだが。

蛭田　いやいや、藤堂さんは充分過ぎるほどやってるじゃないですか。とりあえず皆呼んできます。
藤堂　頼んだ。

蛭田、下手後方に走り去る。藤堂の携帯が鳴る。

藤堂　藤堂です。この間はどうも。探し物は見つかりましたか？ ・ ・ ・ これは失礼。それで？ ・ ・ ・ はい。 ・ ・ ・ はい。そうですか。約束は守って頂いた、という事ですね。 ・ ・ ・ 分かりました。感謝致します。

藤堂、携帯を切りしもう。蛭田が全員を連れて下手後方から入ってくる。

藤堂　皆さん、お休みのところを申し訳ないです。

和泉　重要な話があるって、蛭田さんが。

藤堂 はい。あまり良い話ではないのですが・・・先程、食糧庫で在庫を確認したところ、数の合わない

食品がありました。

美咲 えっ!? それって・・・。

蛭田 誰かが盗み食いをしてるって事だろうなあ。

蛭田、緑を睨みながら近づく。

藤堂 倉庫のカギはいつも解放してあるので、誰もが自由に入れます。ですから全員が容疑者となります。

が、今回に限っては犯人捜しをするつもりはありません。

守 何故?

藤堂 私の管理不行き届きです。不満のある方は私の分配分から調整しますのでおっしゃって下さい。

和泉 何が不足したんですか?

藤堂 貴重食糧の内の一つです。

真昼、蛭田の方を見る。蛭田、それに応えて、

蛭田 大丈夫。この間あげたのはちゃんと俺の分からだから。

真昼、ホツとする。蛭田、再度緑に近づき、

蛭田　ただ、こんな事は今まで一度も無くってさあ。誰かさんが来てから急に問題が起こるっておかしいよな。

真昼　ちよつと待つてください。緑を疑ってるんですか!?

美咲　疑ってるっていうか、緑さんにその辺のルール教えてなかったじゃないですか。悪気無くたべてしまっ・・・

真昼　ありません!! 緑はずっと私と一緒にいたんです。ルールとか関係なしに緑は犯人じゃありませんから!!

緑　真昼・・・。

美咲　そんなムキにならないで下さいよ。可能性の話じゃないですか。記憶が無くて不可抗力で食べちゃうかもしれない人だって居るんですから。

守　和泉はそんな事しません!! 例え記憶が無くても絶対にしません!!

全員、気まずい雰囲気になる。

藤堂　美咲君、こういう感じを避ける為に追及はしない事にしたんだが・・・。

美咲　えー、ヒドくないですか? なんか私悪者みたいなんですけど。

和泉 大丈夫。誰も悪者なんて思っていないから。

美咲 ですよねー。

三上 今後は管理を徹底し、今回の件に関しては不問、そういう事だな？

藤堂 はい。

一同、藤堂の言葉に頷く。美咲だけが不満そう。

守 それで、数はどのくらい減ってたんですか？食生活に支障のあるレベルだとしたらまずいですよね。

藤堂 いや、それなんですが・・・トータルで言うのと逆に増えます。

守 どういう事ですか？

藤堂 先程軍から連絡があつたのですが、最近の作業ノルマの達成率に対し、特別報酬がもらえるそうです。もうすぐ到着するという事だったので・・・。

藤堂、チラッと緑を見る。

緑 隠れてる？

藤堂 正面玄関だと軍と鉢合わせする可能性がある。申し訳ないが裏口から出て欲しい。

蛭田 皆の安全の為だ。我儘言うなよ？

真昼 軍の人が帰ったらすぐ呼ぶから。

緑 分かった!!

真昼 (下手を指して) ゴー!!

緑、下手へ走り去る。

上手から兵士Aが入ってくる。

兵士A 特別報酬を届けに来た。生存人数に応じて量を調整する。一列に並び名前を言うように。

藤堂、蛭田、美咲、三上、守、和泉、真昼の順で並ぶ。

藤堂 藤堂亜樹。

蛭田 蛭田裕也。

美咲 森山三咲。

三上 三上武彦。

守 天野守。

和泉 天野和泉。

真昼 朝比奈真昼。

藤堂 以上七名。変更ありません。

兵士 A ファイルに目を通してから、

兵士 A 食糧を運べ。

兵士がダンボールを運んで来る。(人数は最大六人) 運んでいる間に兵士 A が会話。

兵士 A で、あの後何か変わった事は無いか？

藤堂 そうですね、特に何も。

兵士 A 何かを見つけたりはしてないか？

藤堂 はい。

兵士 A お前達も無いのか？

全員、微妙に頷く。

兵士 A 今日持ってきた食糧は全て日常食だ。甘い物、酒、栄養サプリメント等の貴重食糧は除外してある。

しかし、我々が求めている情報を提供した者には一年分の貴重食糧を贈呈する!!

美咲、大きく反応。藤堂と蛭田、美咲を両側で挟む。

兵士 A ・ ・ ・ 心当たりのある者!!

美咲、右手をバツと挙げようとするが蛭田が押さえる。

美咲、今度は左手を挙げようとするが藤堂が押さえる。

美咲、藤堂、蛭田、手を繋いでいる状態。

美咲 ・ ・ ・ 仲良し!!

兵士 A 何よりだ。

兵士 B 運び終わりました!!

兵士 A ・ ・ ・ これだけのノルマがこなせるなら次回からF地区のノルマ数は考え直す必要があるな。

藤堂 頑張ったからこそこの特別報酬では？労働意欲を削ぐような愚策、軍がするはずありませんよね？

兵士 A、舌打ちをして上手に去る。他の兵士も続いて去る。

美咲、上手の方に移動し、去ったのを確認した後、

美咲 藤堂さんを言い負かそうなんて百年早いのよ!!

真昼 ああ。

藤堂 ああ、大丈夫。

真昼 はい。・・・緑!!

緑、下手からダッシュで入ってくる。

緑 終わった!?

蛭田 はえーな!!

真昼 緑が作業頑張ってくれたから、ホラッ!!

緑 おお!! お手柄!?

真昼 お手柄!!

蛭田 お前が頑張るのは当たり前なんだっての!! 俺だって今まで以上に時間使ったんだからな!!

美咲 来月以降も同じ忙しさなのかと思うとちよつとゲンナリですね。

藤堂 いや、それなんだが・・・。

藤堂、ファイルを見る。

藤堂

一人増えたはずなのに予定より食糧が減っていないんだが……。というよりほぼ変わっていない。この特別報酬を加えたら逆に増加しているくらいだ。緑君、ちゃんと食べているのかい？

真昼

あの、緑は!!

緑

食べてるよ。

真昼

……。え？

緑

ちゃんと食べてる。

藤堂

そうか……。やはり管理の仕方が甘かったのだろう。さて、そうなると増え過ぎてしまった食糧は逆に管理しづらくなるな……。どうでしょう。余分な量はここで宴会でも開いて食べませんか？

美咲

さんせーい!!

守

藤堂さんにしては珍しい提案ですね。

和泉

でもいいと思う。これも緑君効果かしら。

緑

僕？

藤堂

かもしれませんね。

緑

それって褒めてる？

藤堂

そう受け取ってもらって構わない。

緑

おお!! 真昼、褒められた!!

真昼

スゴイ!!

美咲

そんなことより早く食べましょ!! 宴会ですよ、宴会!!

美咲、ダンボールを開ける。

美咲　・・・あれ？見て下さい！！お酒も甘い物もありますよ！？ほら、こっちも！！あの軍の人力マかけ

て私たちの事、騙そうとしたんですね！！最低ですよあいつら！！

蛭田　おまいうって知ってるか？

美咲　はいはい。いーですから早く取りに来てください。

全員、美咲の近くへ。美咲、次々に飲み物を渡していく。

守　ここでやるの！？ちゃんと食堂に移動した方が・・・。

真昼　非日常的なことをするんです！！場所も変わった所の方がそれっぽくないですか。

和泉　そうね。私は面白いと思うけど。

守　まあ・・・確かに面白いね。

全員、飲み物を受け取ったら半円になる。

美咲、自分の分を掴もうとするが上手くいかない。何とか持って半円の中へ。

藤堂 何かな。この乾杯しましょう的な陣形と空気は。

美咲 じゃ、藤堂さんお願いします!!

藤堂 私が!?

蛭田 そりゃ、俺たちのリーダーですし、言い出しっぺは藤堂さんなんですから!!

藤堂 しかし・・・。

守 お願いします。

藤堂 ・・・・じゃあ・・・。えー・・・乾杯。

全員、元気よく乾杯。一口飲んで拍手。

和泉

この拍手って何だろうね。

守 ついしちゃうよね。

三上、上手の階段に座る。藤堂、蛭田、美咲、守、和泉、下手の階段へ。真昼と緑はセンターに。

真昼 ねえ、緑。さっき藤堂さんにさ、ご飯食べてるって・・・。

緑 うん。何かああ答えた方が良いのかなって思ったんだけど。まずかった?

真昼 そんな事はないけど。

緑　なら良かった。正直に食べてないなんて言ったらまた真昼が困るかと思って。

真昼　緑は成長してるんだね。

緑　嘘をつけるようになる事が成長か……。人間関係って難しいね。

真昼　だね……。

緑　でも……。何で僕ってご飯食べなくて平気なんだろう。皆はちゃんと食べてるんでしょ？

真昼　えっと、それは……。

真昼、下を向いてしまう。そんな真昼をジッと見る緑。やがて真昼、意を決して、

真昼　緑、あのね!!

緑　そういえばさ!!

緑の大きな声に周りが注目する。

真昼　……。え？

緑　さっきはありがと。庇ってくれて。嬉しかった。

真昼　蛭田さんに言われた時？だってずっと一緒にいたから。

緑　でも、それでもありがと。

真昼
緑

うん……。どういたしまして。

格好良かった!! バーンって言い切って。

真昼、照れ笑い。美咲、蛭田に近づき、

美咲 いいんですか。あの二人あのままにしてて。

蛭田 何がだよ。

美咲 いー感じじゃないですか。すっごく楽しそう。

蛭田 そーは見えないけどな。

美咲 見えないんじゃないかって、思いたくはないだけなんじゃないですか？このまま放っておいたら、間違いなく真昼さんの心の中に蛭田さんの居場所なくなりですよ。

蛭田 何でそんなことが分かるわけ？

美咲 それはやっぱり、同じ女ですから。

蛭田 そういうもん？

美咲 そういうもんです。

蛭田 ……そういうもんか……。そうか……。そうだな。

蛭田、持っていたお酒をグビグビと飲み干す。

守 お、おい、蛭田くん、大丈夫かい？

蛭田、「ふう〜」と大きく深呼吸。「ヒック」と酔った感じ。

フラフラと立ち上がり、緑の方へ歩いて行く。

藤堂止めようとするが、美咲が「まあまあ」と言い、蛭田の後を追う。

うおーい、緑さんよー。

和泉 蛭田 あれ絶対逆効果だと思っただけ。

俺、気づいちゃったんだけどさ。いくらずっと一緒にいたからつまみ食いはいしてないって言っても四六時中ずっというわけじゃないよな？例えば寝る時は別々なわけだし、その隙にって事も考えられるわけだ。

緑 そんな事言い出したら皆だってそうじゃない？

蛭田 だからお前が来るまでそんな事は一度も無かったんだよ！！

美咲 そーですね。記憶にありません。

蛭田 だよー。なら、お前を真っ先に疑うのは当然だろ？真昼ちゃんがやっさすういーのを良い事に色々やってんじゃねえのか！？ああん！！

美咲 あ、そういえば私、夜中に一人で歩いてる緑さん見たことあるかも！！

蛭田

本当か!?

美咲

暗かったんでハッキリとは見えなかったんですけど、多分!!

蛭田

ほら、見ろ!!ここに証人がいるんだぞ!!

美咲

えー、緑さんってそーゆー人だったんですね。私、ショックです!!

蛭田

正直に白状してみろ!!

真昼

あの、蛭田さん。

蛭田

真昼ちゃん、君は騙されてたんだ、この悪魔に!!目を覚まして!!さあ、俺の胸に飛び込んでおいで!!

真昼

そーじゃなくてですね、蛭田さん、忘れてません?

蛭田

・・・何を?

真昼

緑はその・・・ほら。(アンドロイドだから食事はしません)

蛭田

・・・ああ!!

美咲

みなさーん!!犯人が分かりました!!解決してくれたのは蛭田さんです!!蛭田さんに拍手!!

蛭田

あの美咲ちゃん。

美咲

そして、甘い物を食べた不届き者は緑さんでした!!藤堂さん、これは問題行動ですよね!!?

和泉

え。・・・そうなんですか?

美咲

そうなんですかって、充分問題行動でしょ。何言ってるんですか。

和泉

そうじゃなくて、減ってたのって甘い物だったんだと思って。

美咲 ……え？

和泉 貴重食糧って言っても色々種類あるから。

藤堂 確かに減っていたのは甘味系です。・・・美咲君、何故知っていたのかな？

美咲 ……だって、・・・いやだなあ。さつき藤堂さんが言ったじゃないですか。

藤堂 私が？

美咲 そーですよ。

藤堂 覚えが無いが・・・。（守と和泉に）言いました？

守 いや、言っていないと思いますよ？

和泉 はい。

美咲 ちょっと何ですかそれ。「思います」でしょ？私はハッキリ聞きましたから！！

蛭田 美咲ちゃん。間違いなく藤堂さんは言っていないよ。この場でそれを知ってるの、在庫ファイルを見

た俺だけだと思っただよね。

美咲 あっ！そうです、そうです！！蛭田さんが呼びに来た時に言ったんですよ！！ね、言いましたよね！？

蛭田 美咲ちゃん。

全員、美咲を見る。

美咲 え・・・何ですかその目。私を疑ってるんですか！？そーゆーのってダメだと思うんですけど！！私、

食べてませんからね!!・・・(視線に耐えられなくなり)私・・・、私食べてませんからね!!

美咲、下手へ走り去る。

三上　・・・あいつだな。

全員、うなずく。

守　いくら甘い物が好きだからってこんな事しなくても・・・。

三上　恐らくそれだけじゃないだろ。

守　え？

三上　犯人をその犬に仕立て上げる事によって追い出し、蛭田に恩を売リたかったんじゃないか？

守　何の為に。

三上　自分の立場の確保だろうな。藤堂はリーダーだし。和泉さんには守先生がいる。真昼は蛭田のお気に入りだ。女の中で自分が一番立場が弱いと悩んでいてもおかしくないだろう。ただ・・・だとしてもやり方が強引すぎる。他に何か理由があるのかもしれないがな。

三上　緑　三上が守れば？

三上　(大きくため息をついてから) 明日以降も戦い方を教えて欲しいなら敬語を学べ。

緑 それって大切な事？

三上 必要な事ではあるな。

緑 分かった！

蛭田 何だお前、三上さんには随分素直だな。

緑 そりゃあ、まあ・・・。

藤堂 緑君。

緑 何？

藤堂 疑って申し訳なかった。お詫びをしたいと思います。何か希望はあるか？

緑 僕は別に気にして無いからいいけど・・・。真昼何かある？

真昼 え？

緑 真昼がしたい事やして欲しい事があるならそうしよう！！

真昼 え、でも・・・。

藤堂 真昼君。何かあるなら言って欲しい。不公平になるような特別措置は難しいが、極力希望には添うつもりだ。

真昼 (緑に) いいの？

緑 勿論！！

真昼 えっと・・・じゃあ・・・。あの、私、皆と一緒に畑を耕したいです！！

藤堂 皆で？

真昼

はい。

藤堂

いや、それは・・・。

和泉

私はいいですよ。本当は前からちよつと興味あつたんです。

守

和泉・・・。じゃあ僕もやります。

蛭田

もう、しょーがないなあ!!それじゃあ、ちよつと本気出してる俺、見せちゃうかな!!

藤堂

美咲君には私から話そう・・・三上さん。

三上

・・・分かった。

蛭田

意外ですね、三上さんが二つ返事でOKするなんて!!

藤堂

(真昼に) ただし、毎日という訳にはいかない。全員でスケジュールを調整して都合があつた時、
という事になるが・・・。

真昼

はい、大丈夫です! ありがとうございます!!

藤堂

よし、それでは荷物を運んでしまおう。蛭田君、申し訳ないがこの後食糧の在庫表を作るのを手伝
って欲しい。

蛭田

分かりました。

男性陣、移動してダンボールを下手に運ぶ。守も持とうとするが和泉が無言で止める。

守が持とうとしてたダンボールは縁が持つ。

守と和泉を残して全員下手に去る。

守
・・・どうしたの？

和泉、その質問をはぐらかすように少し間を置き、場所を移動して、

和泉
私は縁君みたいに純粋に庇ってくれた事にお礼は言えないなあ。いつつも迷惑かけて申し訳無さすぎて。

守
迷惑だなんて思っていないって。・・・だって、仮に二人の立場が逆転しても同じ事してくれるでしょ？
それは絶対。

守
なら、大丈夫。一緒なんだから。それに・・・謝るなら僕の方だと思う。

和泉
何で守さんが謝るの？

守
和泉が傷つかないようにって、その場しのぎの嘘について、誤魔化して。でも、それは結局和泉を苦しめる事になってしまった。もっと正面から向き合うべきだったんだ。和泉の病氣と。・・・たまに自分が冷たい人間なんじゃないかって思うよ。

和泉、守に近づいて手を取り、

和泉
守さん。話を聞いてくれる？

守
・ ・ ・ うん。

和泉
優人の事。

守
・ ・ ・ うん。

和泉
あの日、作業が終わった後、優人がどうしても公園で遊びたいって言うから皆には先に帰ってもら

ったの。あの時は何ヶ月も愚猿の姿を見ていなかったし、私の危機感が薄かったんだと思う。本当は守さんが一緒の時間が良かったんだけど・ ・ ・ 。

守
あの頃はまだ施設に百人くらい居たから・ ・ ・ 。確か僕は怪我人や病人の治療で作業にも出れない日が何日か続いていた。

和泉
うん。だから二人で行こうって。ちよつとでいいからって。・ ・ ・ 公園に連れて行ったらあの子、滑り台とかジャングルジムで楽しそうに遊ぶの。ジャングルジムなんか器用にテッペンまで登ってね。「お母さーん」って手を振って・ ・ ・ 。嬉しそうに・ ・ ・ 本当に楽しそうに手を振るの。

和泉、座り込んでしまう。「あの瞬間」のことを思い出す。

和泉
私も手を振り返そうとした時、今までに見た事もないような爪を持った愚猿が急に現れたの。あいづは真っ先に優人に飛びついて・ ・ ・ 優人の胸を刺した。洋服がどんどん赤く染まっていて、あんなに元気だった体がグッタリして・ ・ ・ 、でもまだ意識のあった優人が口を開いて何か言おうとしているのよ。掠れた声で必死に何か言おうとしているの。・ ・ ・ 多分、「助けて」って言ってたんだと

思う。でも愚猿に睨まれた私は動けなかった。優人は何度もあいつに刺されて・・・何度も何度も刺されて・・・でも私は怖くて、体が動かなくて、それを・・・あの子の体が目の前で切り刻まれていく姿を、ただジッと見ていることしか出来なかったの・・・。

和泉、守の手に額を押し付けて、

和泉

ごめんなさい。私、優人を守れなかった。私・・・あの子を守ってあげる事が出来なかった・・・。
許して・・・。守さん、許してください。・・・許してください。

守、手を和泉の肩に置いて、

守

知らないって怖い事だよな。・・・以前の僕ならもしかしたら怒ってるかもしれない。和泉を罵って、自分勝手な気持ちを吐き出していたかもしれない。でも、僕は知ってる。愚猿と対峙した時の恐怖。あれは普通の人の心で耐えられるものじゃない。だから、僕は和泉を責めたりしない。絶対に。

和泉

守さん。

守

優人の事を思い出さない日はないけど、それでも僕は、和泉だけでも生きてくれて良かったと思ってる。ずっとそう思ってる。・・・和泉。

守、和泉を立たせる。

守 話してくれてありがとう。

和泉 本当は話すのが怖かった。

守 うん。．．．ありがとう。．．．そういえば、和泉は良く助かったね。

和泉 うん。．．．私の方にも襲いには来たんだけど、

守 え!?

和泉 なぜか急に止まって、そのまま去って行ったの。．．．多分、愚猿になったばかりだったんだと思う。

守 そうか。．．．。(雰囲気を変えるように) 今日はず、優人の思い出話をたくさんして、たくさん泣こう。

和泉 賛成。

守、和泉、下手後方に去る。

照明変化。(図書館の明かり)

緑が一人で下手から入ってくる。手には辞書。

緑 敬語とは．．．相手に対する敬意を示す為に用いられる言語表現。一般的には尊敬語、謙譲語、丁寧語に分類される。．．．敬意? 敬意。．．．敬意。．．．敬意、尊敬する気持ち。．．．尊敬? 尊敬、

尊敬、尊敬……。その人の人格を尊いものと認めて敬うこと。尊い？尊い、尊い、とうと……。辿りつかねー!! (額を押さえて) 何でこれやっても出てくる言葉と出てこない言葉があるんだろ？ (辞書を見て)……。尊い……。成程。うん、真昼は尊い。でも三上は別に尊くないけどな。……。尊敬？感覚的には三上は尊敬かなあ。ってことはやっぱり敬語を使った方がいいのか。蛭田が「基本的には語尾にです、ます付ければいい」って言ってたけど……。そうなると……。丁寧語ね。ふーん……。言葉そのものじゃなくて、表現の仕方で感情を伝える方法もあるのか。うん、面白い！

緑、周りの本にも目を向ける。

他には……。言葉で人生が変わる。「人間関係が劇的に変わる10の言葉」。「言葉は力だ」。「気持ちつながれば言葉もつながる」。「とつさの一言」。「言葉に頼るな」えっ!？……。そんなこと言われても……。

緑、他の棚にも目を向ける。

こっちは……。? プログラム言語。「コンピューターの未来」。「ロボット技術論」……。「ロボットとサイボーグ」。

緑、一冊の本に目がとまり手にする。

緑
・・・「アンドロイドの最先端技術」

緑、ゆつくりとページをめくる。次第にページをめくるスピードが速くなる。全部読み終わった後、ゆつくり本を閉じる。緑、動揺した顔を客席に向ける。

暗転。

真昼、藤堂、蛭田、美咲、守、和泉、三上が鍬を持って入ってくる。

照明変化。（畑の明かり）

全員で畑を耕している。美咲は特に頑張っている。

蛭田
緑のヤロウ何やってんだよ。

真昼
すみません。先に行つて欲しいって言われて・・・。もうすぐ来るとは思ってますけど。

蛭田
真昼ちゅわんが謝る事ないよ!!どーせ畑を耕すのに飽きたとかそんなんじゃないの。

真昼
それはないと思いますけど、ただ・・・朝はいつもと様子が違っていたような気がして、ちょっと心配なんですよね。

守
具合でも悪いのかい？

真昼
あ、いえ。元気がなかったわけじゃないので。

蛭田

そんなのどーせ、真昼ちゃんの気を引こうとしてるだけだって!! ったく俺たちだけ働かせやがって。

和泉

でも、いつもの作業と違ってずっと気持ち良い疲れじゃない?

守

今日はグッスリ寝れそうだね。

和泉

その前にご飯たくさん食べちゃいそう。

藤堂

そうですね。今日は少し多めにご飯を炊きましょう。

真昼

あ、緑!!

真昼、緑に気付き手を振る。上手から緑が走って入ってくる。

緑、立ち止まり皆を見て、

緑

皆さん。遅れて申し訳ありません。

全員持っていた鍬を落とす。

緑、藤堂に近付き、鍬を拾って渡しながら、

緑

藤堂さん、今日も作業場での効率的な指示、お疲れ様でした。

緑、守と和泉の鍬を拾って渡しながら、

緑 守さん。和泉さん。体調は大丈夫ですか？我々の健康は二人にかかっていると云っても過言ではあ

りません。ご自愛ください。

緑、美咲の方に行き、鋤を拾い渡しながら、

緑 美咲さん。僕、甘い物は苦手なので、もし良かったら僕の方、食べて頂けると助かります。

美咲、鋤を受け取ったら再び畑を耕し始める。

緑、蛭田に近付き、鋤を拾い渡しながら、

緑 蛭田さん。．．．．．うん。（思い浮かばず三上の方へ）

蛭田 うんって何だよ！！

緑 三上さん。今日もこの後、戦い方のご指導よろしくお願いします！

三上 誰だお前は？

緑 ．．．あれ？

守 キャラの振り幅がデカすぎてついていけないよ、こっちは。

蛭田 うんって何だよ！！

緑 え？こういう事じゃないんですか？

藤堂 まあ、そうなんだが・・・。

和泉 もう少し柔らかい感じの方がいいんじゃないかしら。

緑 柔らかい感じ・・・。はい、考えてみます。

真昼 でもスゴい！！敬語操ってる！！

緑 スゴい！！？

真昼 スゴい！！

三上、輪から外れて上手の階段の所へ移動して座る。

緑 あ、三上さん。さっきの本当をお願いします。

三上 お前の吸収力には驚かされる。敬語といい、戦い方といい。俺が教えられる事なんて殆ど無いぞ？

緑 でも、僕はまだ三上さんから一本も取れてないです。

三上 ・・・・分かった。

蛭田 あーれー？美咲ちゃん。何でそんなに一生懸命耕してるの。嫌がってなかった？

美咲 はい。嫌です。

蛭田 へ？

美咲 土いじりは嫌いです。手が汚れるから。・・・でも、何かこういうのは好きかもしれません。

和泉
こーいうの？

美咲、和泉の方を見る。体を向けるが顔は下を向く。

美咲
・・・熱中できる何か。

美咲、言った後で周りの雰囲気になり顔を上げる。和泉が微笑む。

美咲
・・・何ですか。

和泉
ううん。・・・それで？

美咲
それでって・・・真昼さん。これからも畑、耕し続けるんですか？

真昼
え？・・・うん。

美咲
どんなに頑張っても咲かないかもしれないの？

真昼
うん。

美咲
それでも続けるの？

真昼
・・・うん。

美咲
そっか・・・。羨ましいです。私、特にやりたい事があるわけじゃないし。なりたいものがあるわけじゃないし。ただ毎日起きて作業して食べて寝て、ずっとその繰り返しです。だったら楽な方が

いいやって思って、騙したり、嘘ついたり、ズルしたり……。こんな毎日が続くなら死んだ方がマシなんじゃないかって思うこともあるんですけど、でも、死ぬのは凄く怖くて嫌だし……。あれ？私何言ってるんだろう。

和泉　大丈夫……。それで？

美咲　・ ・ ・ やっぱり畑を耕すのは手が汚れるから嫌いなんですけど、真昼さんの気持ち少しは分かったっていうか。・ ・ ・ 私も何か見つけたくなって。・ ・ ・ 思いました。・ ・ ・ はい、以上、終わり!!

和泉　じゃあ、私たちも美咲ちゃんが無かを見つけれられるように協力するね。

美咲　だから、そういうのはいいんですって!!

藤堂、真昼、緑、守、和泉、蛭田、美咲の近くに来てからかう。

三上、急に立ち上がる。全員、三上を見る。

蛭田　どうしたんですか？

三上　空気が変わった。

蛭田　はい？

三上　犬、構えろ!!皆は上に!!。・ ・ ・ 来るぞ!!

緑が真昼、藤堂が守、和泉、蛭田を下手後方の階段へ誘導。

同時に愚猿が入ってくる。階段上の役者は身を低くする。

緑&三上対愚猿の殺陣。

愚猿がいなくなってから緑、下から真昼に声をかける。三上は上手を警戒している。

緑 真昼!!勝ったよ!!

真昼 大丈夫!?怪我してない?

緑 大丈夫。どこもやられてないから。それより見ててくれた!?

真昼 見てたけど・・・あんまり危ない事して欲しくないかも。

緑 えー?それじゃ真昼を守れないでしょ?

下手から愚猿のボスが入ってくる。

ボスの姿を確認した和泉、ふらっと立ち上がる。

和泉 ・・・あの愚猿・・・。

守 和泉?

三上、振り返ると同時にボス、緑に突進。

三上
犬!!

三上、緑を突き飛ばし、ボスの攻撃を受け止める。
ボス、三上を大きく弾き飛ばす。三上、軽げながらも体勢を戻しボスを見る。

三上
キサマ……。キサマ!!

三上、立ち上がる。ボスの雄叫び。新しい愚猿が入ってくる。

蛭田
まだこんなに居やがったのか!?

緑
蛭田さん、皆を安全な所に!!

藤堂
近くにビルは!?

真昼
あっちの方にあります!!

真昼、下手後方を指す。

藤堂
どのくらいの距離がある!?

真昼
多分、五、六百メートルです!!

藤堂

よし、一気に走るぞ!!

全員立ち上がるが、美咲フラツとする。

守

美咲君？

守が声をかけた瞬間、美咲、その場に倒れる。口々に美咲の名を呼ぶ。

三上

どうした行け!!

藤堂

美咲君が倒れました!!

三上

やられたのか!?

藤堂

いえ、原因不明です。

三上

先生!! 蛭田!! 美咲を担いで移動しろ!!

藤堂

三上さんも一緒に移動して下さい!!

三上

俺はヤツを殺す!!

三上、ボスに突進。ボスと対決している時に他の愚猿が三上の背中を攻撃。体制を崩した三上にボスが攻撃を加える。

他の愚猿と戦っていた緑、三上がやられた事に気付き、走り寄る。

緑
三上さん!!

三上
お前は皆と移動しろ。追ってくる愚猿を牽制しつつ逃げるんだ。

藤堂
ダメです。三上さんも一緒に!!

三上
俺は!!

藤堂
リーダー命令です!!緑君一人では追ってくる愚猿を捌ききれません!!全滅させたいんですか!?

三上、傷を押さえながら立ち上がる。

三上
蛭田。先生から刀をもらって真昼と先頭に立て。美咲は先生と藤堂、和泉さんで抱えろ。犬、俺達

は極力距離を取りながら移動する。

緑
大丈夫なんですか、その怪我で。

三上
俺の心配はいい。お前は自分のやるべきことをやれ。

緑
分かりました。

藤堂
移動するぞ!!

階段上にいる人物は全員下手後方へ去る。

緑は下手階段を使い上へ。三上は上手階段を使い上へ。下にいる愚猿を警戒しつつ下手後方へ移動。三上、去る前に刀の先をボスへ向ける。

ボスの雄叫び。それに合わせるように他の愚猿も雄叫びを上げる。

緑、三上、下手後方へ去る。

ボス、愚猿、下手と下手後方を使つて去る。

照明変化。(施設の明かり)

蛭田と真昼が上手から入ってくる。辺りを確認。

藤堂、守、和泉が美咲を抱えて入ってくる。

和泉
守

美咲ちゃん、聞こえる!? 大丈夫だからね。意識をしっかりと持って!! 美咲ちゃん!! 手を握って!! その広い所で。

守、美咲をセンターに寝かせる。

緑、三上が上手から入ってくる。

三上は出入り口を警戒。緑は真昼の近くへ。

真昼
緑

緑!!

大丈夫だった?

真昼 うん。私は大丈夫。でも美咲さんが・・・。

緑 どうしたの？

真昼 分からない。急に倒れて動かなくなったの。

蛭田 三上さん、愚猿は・・・。

三上 ここにくるまでに撒いてきた。しばらくは時間が稼げるだろう。ただ・・・暗くなる前に施設に戻

った方がいいだろうな。先生、美咲は動かしても・・・、

守 こっちに来ないでください!!

全員、動きが止まる。

守 その赤くなった目は充血によるものじゃない・・・。染色体の変化によるものだ。それに、少しずつ

つ骨格が変形している。美咲君。君は・・・。

美咲、守を突き飛ばし立ち上がる。手を握っていた和泉を盾にする。上手側に三上、蛭田。下手側に藤堂、真昼、緑、守。

美咲 動かないでください!!今の私なら首の骨くらい簡単に折れますよ？

藤堂 美咲君。・・・とうとう君まで。

緑 どうしたんですか。そんなに元気なら早く施設に戻りましょうよ。

守 緑君!!

緑 だから・・・何なんですか。美咲さん、どうしたんですか!? 早く戻りましょう!!

蛭田 見りや分かるだろう!!これが現実だよ!!愚猿つてのはな・・・愚猿つてのは元々は人間なんだよ!!

緑 愚猿が・・・人間?

藤堂 だから我々は軍から共同で生活することを命令されている。もし誰かが愚猿になりそうだった場合、その始末をする為にな。

藤堂、銃を取り出し、美咲に構える。

緑 藤堂さん!?

藤堂 和泉さんを離しなさい。そして施設に戻り、守先生から安楽死出来る薬を貰いたまえ。

美咲 ・・・・嫌です。

藤堂 勿論その前に好きなだけ甘い物を食べるといい。我々の分は全て君にあげよう。

美咲 嫌です。絶対嫌ですよ!!私は死にたくないんです!!

藤堂 美咲君!!

美咲 やりたいこととか、もうそんなのどーでもいいです!!愚猿になったっていいんです!!死ぬのは嫌

です!!ねえ藤堂さん、お願いします。見逃して下さい。

藤堂

それは・・・出来ない。

美咲

どうしてですか!? だって私ずっと藤堂さんの役に立ってたでしょ!? 色々助けてきたじゃないですか!! 今度は藤堂さんが私を助ける番だと思っんですけど!!

蛭田

美咲ちゃん・・・これは軍が決めたことだ。人間にとって危険な存在になる愚猿をこれ以上増やすわけにはいかない。

美咲

何が軍ですか、何が人間ですか!! 軍が私たちに何かしてくれました!? 家畜みたいに管理してるだけじゃないですか。毎日やってる作業だって人間が地下に移り住むなんて目標与えて暴動が起きないようにしてるだけですよ? この中に一人でも実現出来るって思ってる人いるんですか!? 皆、心の中じゃ分かってるくせに・・・。人間はね、もう終わりなんですよ!!

藤堂

美咲君の言う通りだ。人間はもう終わりなのかもしれない。

美咲

なら!!

藤堂

だとしても!! いや・・・だからこそ。人間のまま死ぬことが大切なのではないか?

藤堂、銃を構え直す。

緑

何やってるんですか藤堂さん!! 何で・・・何でこんな世界になってまで人間が人間に銃を向けるんですか!!

美咲

ですよ。藤堂さんはそうやってリーダーっていう権限に守られて沢山の人達を殺してきたんです

三上

もんね!!まだ愚猿になっていない人達を沢山殺してきたんですもんね!!
美咲!!

三上、刀を抜く。

美咲

そうでした。私みたいに聞き分けない人の息の音を止めてたのは三上さんでした。愚猿も人間も沢山殺してきて、・・・死んだら絶対地獄行きですよ。

藤堂

美咲君!!

美咲

いーじゃないですか!!・・・人間のまま死ぬのが怖いって言ってるんです。愚猿になったら殺して下さいよ。それまでは生きていいでしょ!?

美咲、上手側を見て、

美咲

そこをどいて下さい。本当にこの人の首、折りますよ?

三上、蛭田、ゆっくりセンター後方へ移動。

それに伴い、美咲、和泉を盾にしながら上手へ移動。

藤堂 美咲君!!これは私からのお願いだ。和泉さんを離してくれ。

美咲 何で私が一方的に藤堂さんのお願いを聞かなきゃいけないんですか。私は、

和泉 ねえ、美咲ちゃん。

美咲 ・・・何ですか？

和泉 死ぬのは・・・恐いわよね。人として意識があるなら尚更。でも・・・大丈夫。

美咲 何がですか。

和泉 死ぬのが恐いの一人だから。・・・死を分かち合える人がいないから。自分が無価値な人間なんじ

やないかって思っ、それを否定して欲しかったんだよね。

美咲 だから何ですか!!あんななに何が分かるんですか!?

和泉 だから大丈夫。・・・私が一緒に死んであげる。

守 和泉!!

和泉 安心して。美咲ちゃんは無価値な存在なんかじゃない。美咲ちゃんは私にとって一緒に死んでもい

いって思えるくらい大切な人よ?

美咲 ・・・だから・・・。

和泉 藤堂さん、撃ってください。

守 和泉!!

和泉 ごめんなさい、守さん。私は美咲ちゃんと一緒にいくね。

美咲 だから!!

美咲の大きな声に全員が止まる。藤堂、銃を構え直す。

美咲

・・・だから嫌いなんですよ。あなたの事が。人を見透かして優位に立って満足ですか？私が本当に殺さないとも思ってるんですか！？

美咲、和泉を自分の方に向けて顔を見る。和泉は真っ直ぐ美咲の顔を見て微笑む。

美咲

何ですかその顔。だから嫌いなんですよ。でも一番嫌いなのは、・・・その顔に救われたって思ってる自分です。

美咲、和泉の首に手をかける。

藤堂

美咲君！！

藤堂、銃を構え直す。一瞬の緊迫した間。

美咲、和泉を蛭田、三上側に放り投げて、自身は上手へ逃げようと背を向ける。その瞬間、全弾を打ち込む藤堂。銃弾を浴びて倒れる美咲。静寂。藤堂、動かなくなった美咲の元へ。

藤堂

君がこの日の為に私の近くにいたことは知っている。私のリーダーとしての立場を利用しようとしていたこともな。だが、それでも悪い気はしなかった。．．．例え利用されていたとしても私は．．．妹だと思っていたからな。

藤堂、美咲の頭を撫でてやる。

藤堂

私は美咲君の理想とする役割を果たせていたか？いや．．．それは無いな。こんな時にですら涙も流せない私では．．．。

藤堂、銃を見た後、再び美咲の頭を撫でてやる。

藤堂

貴重な弾丸を全て使った事が私の気持ちだと思って欲しい。．．．美咲君、苦しまずに逝く事は出来たかい？

守、和泉の近くへ移動。手を振り上げる。

守

何であんな事を？一歩でも間違えたら和泉は！！

和泉　・ ・ ・ ごめんなさい。でも一人で死ぬのは寂しいだろうなって。

守、手を降ろして、

守　相手の寂しさを考えられるなら、お願いだから、和泉に何かあった時、一人残される僕の寂しさも

少しは考えて欲しい。

和泉、無言で頷く。

三上　動ける奴はついてこい。美咲を乗せて運べる板か布を探すぞ。

三上、下手へ移動。

真昼、緑、蛭田それに続く。

藤堂　私も行きます。

三上　大丈夫なのか？

藤堂　はい。

三上　・ ・ ・ 一人の命を奪ったかもしれない。だが同時に一人の魂を救ったのも事実だ。それと ・ ・ ・ 美

咲が愚猿になっていたら殺していたかもしれない誰かの命もな。

藤堂

そう考えると？

三上

事実だ。行くぞ。

三上、下手の階段を上ろうとした時、刀を落とす。拾おうとするがうまくいかない。

真昼

大丈夫ですか！？　　そういえばさっき愚猿に！！

三上

大丈夫だ。

真昼

だって刺されてたじゃないですか！！

三上

・・・大丈夫だ。

三上、無理やり刀を拾い下手後方に去る。

真昼、蛭田、藤堂の順で移動。

緑が移動しようとした時、守が声をかける。

守 緑

緑君。

はい。

緑、止まって守の方へ。

守、何か言おうとするが言葉がうまく出ず止まってしまふ。

一度、空気を変えるように着ている背広を美咲にかけてやる。

倒れている美咲を見たまま、緑に語りかける。

守

今までの経験から、人間が愚猿になる現象が発生した場合、一人で治まるとは考えづらなんだ。まるで伝染のように次から次へと人が愚猿に変わってしまう。体が愚猿への変化に耐えられなかった場合、いろんな機能を失いながら衰弱して死んでしまうんだ。

守、緑の方を見て。

守

緑君にはこれから先、悲しくてつらいことが沢山待っている。でもそれでも足掻けるだけ足掻いて欲しい。どんなに絶望しても生き抜いて欲しい。そして、僕達が今ここでこうして生きていたって証を残してくれないか。・・・困るよね、こんなこと言われても。でも、託したいんだ。

僕にそれを託すのは、僕が愚猿になることも、病気で死ぬこともないからですか？

・・・え？君は・・・。

守 緑

緑、守の反応を見て寂しそうに微笑む。

緑

分かりました。どんなことがあっても足掻きます。足掻いて生きて、証を残します。だから守先生、和泉さん。その時が来てもどうか安心してください。

守

緑君・・・ありがとう。

暗転。

明かりがつく。（施設の明かり）

下手から三上が二本の刀を持って入ってくる。

上手へ去ろうとした時、藤堂、蛭田、守、和泉が入ってくる。

藤堂

こんな時間に外出ですか？

蛭田

動かない方がいいですって。あんな大怪我してたのに。

三上

傷ならもう治った。

蛭田

そんな訳ないでしょう。爪が貫通してたんですよ！？

三上

分かっているはずだ。

蛭田

・・・何がですか。

三上、少しセンターに移動し、

三上

この赤い目を見ればわかるはずだ。

藤堂

だから行くんですか？もう時間がないから。

三上

安心しろ。目的を果たしたら自分の始末は自分でする。

藤堂

その言葉を信じて見逃せと？事情があるのは三上さんだけじゃないんですよ！？

藤堂、銃を構える。

三上

だが、愚猿どもを殺せるのは俺だけだ。見逃す見返りとして辺り一帯の愚猿どもを一掃してやる。数ヶ月後には新しい愚猿どもの縄張りになるだろうが……しばらくは平和な日々が送れるだろう。

藤堂、ゆっくり銃を下ろす。

和泉

三上さん、あの特殊な爪を持った愚猿と何か関わりがあるんですか？

三上

何故です？

和泉

あの愚猿は……優人を……私たちの子供を殺した愚猿です。

三上、守と和泉の近くへ移動。

三上 後藤修一郎。あいつが人間だった頃の名前で・・・俺の親友でした。

守 ……え？

和泉 どうして後藤さんが愚猿だという事を知っているんですか？

三上 ……見ていたからです。

和泉 見ていた・・・。

三上 後藤とは中学からの腐れ縁ってやつで、高校、大学と進み、共に警察に入ることを選びました。互いに結婚し子供をもうけ、家族ぐるみの付き合いをしていました。戦後あいつは隣のE地区にいたのですが・・・ある日、急に呼び出されました。久しぶりの再会に家族同士しばらく談笑した後、あいつが相談を持ちかけたのです。「愚猿になってしまいかもしれない。死にたくないので逃亡を助けて欲しい」と。いつも男らしく、正義感に溢れ、誰よりも強かったあいつが体を震わせながら懇願してきたんです。

和泉 ……それで？

三上 俺は迷い、答えが出せませんでした。沈黙が続いているとあいつは急に苦しみ出し、大きな叫び声を上げると、体を黒く変色させ・・・愚猿になりました。特徴的だった爪が目に入った瞬間、その爪は俺の妻と子供を貫き、切り裂きました。

蛭田 そういえば、三上さんの家族がいなくなったのも優人君の時と同じ日でしたよね。

藤堂 私は失踪したと報告を受けたはずですが。

三上

すまない。二人は俺がこの手で埋めて弔った。俺はヤツを追いましたが捕まえることが出来ず、優人君が犠牲に……。守先生。和泉さん……。申し訳ありませんでした。俺の甘さが大切な息子さんの命を奪ってしまいました。

三上、守と和泉に頭を下げる。和泉、三上を見て次第に怒りが頂点に達する。和泉が大きく手を振り上げた時、守が和泉を押さえる。和泉、激しく抵抗するがやがて諦めて座り込む。

守、和泉の肩に手を置いて慰めつつ、

守

事情はよく分かりました。これから三上さんなりのケジメをつけに行くんですよ。でもそれが私達の子供の敵討ちと言うなら行かせることは出来ません。それを目的にすると言うのなら、例えば三上さんでも僕の全身全霊をかけて止めてみせます。

三上

俺はそこまでお人好しじゃない。俺が行くのは、俺自身の復讐の為だ。

守

なら、止める理由はありませんね。

三上

気づかなかった……。守先生は俺よりずっと強いんだな。

守

強くありませんよ。僕は一人じゃなかった。ただそれだけです。

三上

……。ありがとう。

蛭田

三上さん……。。

三上、蛭田の呼びかけに無言の頷きで応える。

三上 藤堂。礼を言う。お前が皆を守れと命令してくれたおかげで俺は人でいられた。

藤堂 ……お疲れ様でした。

三上、藤堂のその言葉に少し笑い、上手に去っていく。

蛭田 でも、いいんですか？あの愚猿の強さは半端じゃないですよ。いくら三上さんでも他の愚猿の相手をしながらあいつと戦うなんて……。

上手から真昼と緑が入ってくる。

真昼 ただいま戻りました。

藤堂 ああ。

真昼 今、出て行ったの三上さんですよ？どうしたんですか、こんな時間に。

藤堂 三上さんは……この辺り一帯を縄張りになっている愚猿を一掃する為出て行った。……おそらく
う戻ることはないだろう。

緑 え？どう言うことですか！？

守 三上さんの体に愚猿へ変化する兆候が見られた。残された時間が少ないと判断した三上さんは…。

緑 愚猿達の所に行ったんですか!? あつちにはあの愚猿が居るんですよ!!

蛭田 分かってるよ!! 分かってるけど俺達じゃどうすることも出来ねえだろうが!!

緑 だったら何故引き留めなかったんですか!!

蛭田 引き留めてどーするんだよ!! それで愚猿になる前にここで死んでくださいって言うのか!? 死ぬ覚

悟して目的を果たそうとしてる男にそんな事言えんのか!?

緑 だったら!! ……僕が行く。

真昼 緑!!

緑 真昼ゴメン。必ず戻るからここで待ってて。外に出ちゃダメだ。絶対にここで待ってて。

真昼 ……緑がしたい事なの?

緑 三上さんは僕に大切なことを教えてくれた。僕は三上さんの役に立ちたい。今の僕ならそれが出来
ると思うから。

真昼 ……分かった。ここで待ってる。

緑 ありがとう。…真昼、命令して。

真昼 緑、行って三上さんを助けて。それから、必ず帰ってきて!!

緑 分かった!!

緑、上手へ走り去る。

念の為に守りを固めよう。守先生と和泉さんは協力して3階を、真昼君は2階のシャッターを閉めて欲しい。蛭田君は1階及び食堂を頼む。私は食糧庫を整理し、皆が避難できるスペースを確保する。

全員、口々に「分かりました」「はい」「了解」など返答。

守、和泉は下手後方。真昼は上手後方。蛭田は下手に走り去る。

藤堂、上手を少し見送った後、下手へ走り去る。

照明変化。(夜の広場)

愚縁が上段下段から入ってくる。上手を警戒してる様子。

三上が上手後方から入ってくる。

音楽。

三上、一本の刀を床へ。もう一本の刀の鞘を抜き階段を降りる。

三上と愚縁の殺陣。数手を終え、三上、センターに。

三上、一瞬手が思うように動かず必死にもう片方の手で押さえる。同時に頭痛が襲ってくる。頭を抱える三上。

三上

・・・俺の魂をくれてやる!! そのかわり・・・お前達の命を俺によこせ。

再び三上と愚猿の殺陣。頭痛に頭を抱えながら戦う。

次第に防戦一方になり、隙をつかれ、一匹の愚猿に肩口を刺される。

その瞬間、愚猿が一斉に襲いかかり囲まれる。

愚猿からの攻撃を防ぎつつ氣力を振り絞り攻撃。離れる愚猿。

三上、膝をつく。愚猿の雄叫び。二匹の愚猿がとどめを刺そうと三上に突進した時、上手から緑が入ってきて愚猿を攻撃。

緑

三上さん大丈夫ですか!?

三上

お前、何故ここに!?

三上、立ち上がろうとするが倒れてしまう。

緑

三上さん!!

愚猿が三匹襲ってくる。二匹は緑が相手をするが、一匹が三上の方へ行ってしまう。三上、必死に對抗するが攻撃を受けてしまう。

緑、二匹を倒した後、三上の方を振り返り愚猿を攻撃。

三上から引き離す。三上、立ち上がれない。

緑
三上さん。．．．三上!!

音楽。

緑
いつまで座ってんだよ、しっかりしろ!!こいつ等全滅させるんだろ!?立てよ!!．．．なあ、あん

三上
た僕の先生なんだよ。情けない姿見せないでくれよ．．．立てよ。立て!三上!!
俺と話す時は．．．敬語と言ったろう!!

三上、立ち上がる。よろける体を緑の肩を掴んで耐える。

三上
もう一度聞く。何故ここに居る。

緑
いや、その、道を歩いてたら迷子になりました。

三上
そうか．．．なら、お前を飼い主の元へ無事返すのが俺の務めだな。

緑
だから犬じゃないですって。僕は、

三上
緑!!．．．油断するなよ?

緑

・ ・ ・ はい!!

三上

行くぞ!!

緑、三上対愚猿の殺陣。

全ての愚猿を倒し終えたところでボスが下手後方から現れる。

この時、三上は下手側、緑は上手側に分かれている。

ボスがセンターに移動し、下に飛び降りる。着地した後、左右の腕を伸ばし、緑と三上を牽制。

三上

久しぶりだな。・ ・ ・ お前に殺された俺の家族・ ・ ・ 紬と葉月の敵を取らせてもらっぞ。

緑、三上対ボスの殺陣。三上、愚猿化が進行しているのか体が思うように動かない。緑が何度か三上を助ける。

ボスの攻撃が続き、三上が飛ばされる。緑、必死に応戦。

ボスの圧力に緑も飛ばされる。ボス、緑にとどめを刺そうとした時、

三上

後藤!! ・ ・ ・ お前の相手は俺だろう。

ボス、三上の方へ振り返る。

三上

緑、ここから先は手出し無用だ。こいつは俺一人でやる。

緑

(何か言いかけるが言葉を飲み込んで)・・・分かりました。

緑、邪魔にならない場所へ移動。三上、気合を入れて立ち上がり、上手後方に刀を置き、元々置いてあった刀を拾う。

音楽。

三上

お前の刀だ。これでお前の命を絶つ。

三上、抜刀。向かい合う三上とボス。呼吸を合わせて殺陣。

最終的には三上、上手階段から上へ。ボス、下手階段から上へ。三上、鞘を拾う。ボス、三上の心臓を貫く。三上、鞘を使い、ボスの空いている腕を極める。

三上、ボスの首に刀を刺し、捻り、斬る。

ボス、よろよろと下がり舞台後方へ落ちて消える。

三上、片膝をつくが辺りを警戒。

三上

緑!! あいつは!!・・・あいつはどうなった!!

緑 三上さん・・・。

三上 緑!!

大丈夫です。あいつは三上さんにとどめを刺され、崖の下へ落ちました。もう起き上がることはありません。

三上 ・・・そうか・・・。

三上、刀を納刀する。三上、自分の使用していた刀を指差して、

三上 緑、俺の使っていた刀をやる。大切に使いよ?

緑 え、でも・・・。

三上 俺にはもう必要ないからな。その代わりといっては何だが・・・藤堂に伝言を頼みたい。

緑 ・・・何ですか?

三上 約束は守ったと。それから・・・お前はもう十分頑張った。あとは自分の好きなように生きるべきだと・・・伝えてくれ。

緑 ・・・はい。

三上、急に頭を上げて、

三上
緑

誰だ？誰かそこにいるのか？
え？

緑、辺りを見渡すが誰もいない。

三上、誰かが近くに來た様子で立ち上がる。

三上

紬。葉月。迎えに来てくれたのか……。外は危ないぞ。さ、一緒に帰ろう……。

三上、後ろを振り返り、一步步いた瞬間倒れ、そのまま舞台後方へ消える。

緑、三上の刀を手にする。

照明変化（センターにサス）緑にだけ明かり。

緑

最後に見せた三上さんの笑顔……。僕は皆にそれを伝えました。終わりの瞬間は決して壮絶なものではなく、心穏やかに逝けたことを知って欲しかったから。でも……言うべきじゃなかったのかもしれない。この日を境に、真昼の顔から笑顔が消えていきました。

緑の独白の間に、藤堂、蛭田、守、和泉、真昼が入ってくる。

照明変化。（施設の明かり）

藤堂　　そうか……。三上さんは笑って逝けたのか……。報告ありがとう。ゆっくり休むといい。

緑　　それから。

藤堂　　まだ何か？

緑　　藤堂さんに伝言が。

藤堂　　聞こう。

緑　　藤堂さんはもう十分頑張った……。あとは自分の生きたいように生きろって。

藤堂　　三上さんが？

緑　　はい。

藤堂　　……。まったく。その言葉、そっくりそのままあの人に返したいくらいだ。

藤堂、下を向いて考える。長い沈黙。やがて顔を上げ、全員の顔を一通り見る。

藤堂　　皆さん。今をもってこのグループのリーダーを降りてもいいでしょうか。

守　　それはまあ勿論。今までずっと大変だったと思いますから。

藤堂　　それと、この施設も出ます。

和泉　　え、出てどうするんですか？

藤堂　　どうもしません。その日その日で行きたいところに行き、「その時」が来るまで一人で生活したいん

です。

蛭田

どうしたんですか急に。

藤堂

急にはないさ。私は元々そういう人間なんだよ。他人と居ることが苦痛で仕方がないんだ。冷静というだけでリーダーになり、今までずっと自分を偽ってきた。三上さんはそれに気付いていたんだろ？

真昼

どうして今まで頑張ってくれたんですか？

藤堂

どうして……。そうだな。他人と居ることが苦痛だからといって他人が死ぬのを平気だとは思えないから、かな。

真昼

藤堂さん……。

藤堂

今後、軍との連絡は蛭田君が取るといい。私のことは失踪したとでも伝えてくれ。

真昼

本当に出て行くんですか！？他人との生活が苦痛って言うなら住む部屋を離して、食事だってバラバラに食べれば！！

緑

真昼。

藤堂

すまない。傷つけてしまうかもしれないが理解して欲しい。私にはこういう会話こそが苦痛なんだ。……すまない。

藤堂、守の方へ移動し、

藤堂 守先生。後で例の薬を頂けますか？愚猿化が始まったら必ず飲みますから。

守 その言葉、信じていいんですね？愚猿化が始まった時に飲むんですね。

藤堂 約束します。

守 分かりました。後で取りに来てください。用意しておきます。

藤堂 （全体に）保存食を少し貰っていきます。それ以外の私の食糧は皆さんで分けてください。

和泉 藤堂さん。

藤堂 はい。

和泉 藤堂さんの気持ち、気付いてあげられなくてごめんなさい。でも、私達は感謝しています。本当に

心から感謝しています。

守 僕もです。

蛭田 俺も。

真昼、頷く。

和泉 この言葉も苦痛にさせてしまうのだと思いますが・・・。

藤堂 ・・・・いえ、大丈夫です。ありがとうございます。我慢続けた人生ですが、今の言葉で後悔はありません。

藤堂、大きく安堵のため息。

藤堂

荷物をまとめてきます。

藤堂、下手に去る。緑、その背中を見送りながらセンターへ。

照明、センターのサスのみ。この間に全員はける。

緑

藤堂さんが施設を去ったのはそれから二時間後のことでした。「元気で」と短い挨拶を済ませると一度も振り返ることなく遠くへ消えていきました。自らの意思で自分の最後を決めた三上さんと藤堂さん。だからきつとあの二人も・・・自分達で自分達の最後を決めたんだと思います。僕は二人の出した答えが絶望からではなく、大切なものを守る為だったら良いなど、そう思っています。

時計の音。

緑、センターのサスから外れて下手に去る。

守が上手後方、和泉が下手後方から入ってきて階段を降りてサスに入り、その場に座る。時計の音、徐々に小さく。

照明変化（サスが消え、施設の明かりになるが薄暗い）

守 藤堂さんが施設を去って一週間か……。元気にしてるかな？

和泉 彼女のことだからきつと上手くやってるわよ。どこか居心地の良い場所を見つけて。

守 ……そうだね。でも……。後悔してないかな。実際に一人になってみて。

和泉 多分……。してないと思うし、しないと思う。

守 どうして？

和泉 藤堂さんが一人になれるって分かった時についたため息が、本当に心からホッとしたような感じだったから。

守 そうなんだ。気付かなかったな。

和泉 三上さんも藤堂さんも、最後には自分の人生を生きる為の選択をしたのね……。『救われて笑って』

「安心するため息をついて」……。私もそうありたいな。

守 うん……。僕達も僕達の着地を見つけないといけないね。

守と和泉、互いに何かを考えている間。

守 そういえば、蛭田君の食事は？今日はどのくらい食べてた？

和泉 缶詰一つと、ご飯は茶碗に半分。お味噌汁は全部飲んでくれた。

守 昨日よりも食べてないね。

和泉 うん。でもそれでも「もうお腹いっぱいです」って。

守　今のところの症状は食欲不振と関節の痛み、それと微熱か……。ただの風邪だと良いんだけど。
和泉　違うかもしれないの？

守　愚猿になれない人の初期症状も似ているんだ。まだ決定的な体の変化が見られないから判断できないけど。

和泉　例えば？

守　目が見えなくなったり、耳が聞こえなくなったり……。五感を失っていく事が多い。蛭田君には昨日、軍の医療機関で検査する事を勧めただけど……。断られたよ。「ここに居たい」って。そう……。でも、気持ちは分かるかな。

守　え？

和泉　多分、蛭田君は風邪だとは思ってないと思う。最悪の場合を考えて、軍の知らない人達の中で死ぬよりも、慣れ親しんだこの場所で死にたいって考えてるんじゃないかな。

守　でもそれじゃ治療が。治るかもしれないの？

和泉　……。うん。だから私は蛭田君の気持ちが分かるの。きっと同じ事を思ってるはずだから。

守　同じ事？

和泉　守から視線を外し、少し考える。

和泉　守さんは優しいから何も言わないけど……。本当は気付いてるでしょ？私の記憶がどんどん無くな

っていつてるの。

守、和泉の言葉にどう返答して良いのか分からない様子。

和泉、守の反応を見て、

和泉

気付いてるでしょ？

守

・・・うん。

和泉、その返事にどこかホツとした表情。

和泉

私ね、本当はもう優人のこともあんまり思い出せないの。顔も声もおぼろげで・・・。あんなに大切だったのに。あんなに大事にしたのに。留めておきたいって気持ちじゃ焦れば焦る程削られていくの・・・私が今正気を保っていられるのは守さんがそばに居るから。大切な人の記憶が削られるってね、心がギュツと握り潰されるように痛いよ。

守

（無言でうなづいて）半分でも良いから、その痛みを分け合えたらいいのにな。

和泉

でもね、この痛みがあるうちは二人のことをまだ覚えてるってことだから耐えられるの。それより私が今一番恐いのは優人を忘れる事。守さんを忘れる事。だって、守さんと出会って優人を産めたことが、私が生きた証だから。

守 その言い方はちよつとずるいな。

和泉 え？

守 そんな風に特別だつて思つてるのは和泉だけじゃないよ？僕だつて和泉は特別だから。こんな世界で生きてこれたのは和泉のおかげだつて思つてる。

和泉 ・・・ありがと。

守 こちらこそ、ありがとう。

和泉、少し考えた後、意を決して、

和泉 守さん。・・お願いがあるんだけど聞いてくれる？

守 僕で出来ることなら何でも。

和泉 ・・・私、今のままで人生を終わらせたい。

守 和泉、それは！

和泉 守さんと優人のことを覚えているうちに死にたいの。それが私自身、納得の出来る人生の着地だから。二人のことを覚えたまま逝けるなら、私は笑つて死ねる。

守 愚猿化も始まっていないうち和泉が死ぬのを手伝って？医者の方にそれを了承しろつて言うの？夫の僕にそれを受け入れろつて言うの！？

和泉 考えたのよ！？私だつてちゃんとたくさん考えた。・・でも、もう時間がないの・・。

守　・ ・ ・ ごめん、違う。本当は覚悟してたんだ僕も。覚悟してたはずなのに。 ・ ・ ・ ごめん。
和泉　また謝る。どうして守さんが謝るの？我儘言ってるのは私なのに。

守　我儘なんか言ってない。和泉が僕にお願いすることで我儘なことなんて一つもないから。

和泉　（少し笑って） ・ ・ ・ 不器用だね、私達。

守　（同じように笑って） 本当。不器用だね。

守、和泉を見て、

守　分かった。和泉の願いを叶える。ただし一つ条件が、

和泉　それとね、

守　・ ・ ・ うん。

和泉　もう一つお願いがあるの。

守　何？

和泉　・ ・ ・ 一緒に、死んでください。

守　和泉 ・ ・ ・ 。

和泉　私、守さんを一人残して逝きたくない。

守　僕も、一人残されるのは嫌だな。

和泉　だから ・ ・ ・ 。

守 やっぱり和泉はずるい。僕が言おうとしたこと取るんだもん。

和泉 ずるくなんてないよ？私はね、甘えてるの。

守 そっか。甘えてくれてるんだ……。なら、いいかな。

蛭田が下手後方から入ってくる。守と和泉を見ている。

声をかけようとするが立ちくらみ、目を押さえる。体の異変に怯える蛭田。

守 薬は貴重だから皆の為に取っておかなきゃ。

和泉 外に出ましょ。方法は……。歩きながら。

守 何か、これから死ぬって感じじゃないね、僕達。

和泉 うん。だって、後悔しない為の着地なんだから。

守 他の人からは理解されないだろうけど。

和泉 それで良いの。私達には私達の答えがある。人生は死ぬことを前向きに考えられた者勝ちでしょ？

守 勝ち負けなの？

和泉 そう。勝ち負けなの。

守 それ僕のやつ。

守、笑って和泉に手を差し出す。和泉も笑ってその手を取る。二人、上手に去って行く。

蛭田、声をかけようとするが声が出ない。

照明、下手後方の蛭田にのみ明かり。

蛭田、目が見えない、声が出ない、耳が聞こえない状態。

暗い中、真昼の音がする。

真昼
(単純に声をかけている感じで) 蛭田さん? 蛭田さん。 蛭田さん!!

明かりが付く。下手に真昼。

蛭田
え?

真昼
大丈夫ですか? 具合が悪いようでしたら、

蛭田
何でもない大丈夫。真昼ちゅわんはやっさすいーなー!! それより守先生と和泉さんは。

真昼
一通り探しましたが居ませんでした。

蛭田
やっぱりか・・・。

真昼
やっぱり?

蛭田
守先生達の部屋に行ってきたんだけど・・・大量の薬が用途別に並べてあった。服用の仕方のメモと一緒に。

真昼
じゃあ!!

蛭田 可能性は高いよね。

真昼 ……どうして……。

蛭田 それは、二人じゃないと分からないことだよ。きっと沢山考えて出した答えなんだろうから。

真昼 そうかもしれませんけどでも……ツラかったならちよつとでも相談してくれたら良かったのについて思います。

蛭田 ツラかったのかな。

真昼 え？

蛭田 俺はそう思わない。あの二人ならきつと……二人にとって最善の答えを見つけたはずだよ。三上さんや藤堂さんと同じように。

真昼 ……はい。そうだと良いのです。……何か、蛭田さん、変わりましたね。

蛭田 俺が？

真昼 大人っぽくなったって言うか。優しくなったって言うか。

蛭田、その言葉に少し困った後、

蛭田 えー！？そうかな！？真昼ちゃんがやつと俺の魅力に気付いただけだよ！！

真昼 はい。今の蛭田さんは格好良いのです。

蛭田 によほほほほ！！

蛭田、大笑いした後、急に真顔になり、無言に。

蛭田 真屋ちゃん、俺さ、

真屋 はい。

蛭田 ・ ・ ・ やっぱり何でもない。

真屋、蛭田を見る。蛭田、真屋の視線に耐えられず下を向く。

真屋 蛭田さんはダメですよ？

蛭田 え？

真屋 和泉さん達と同じことしちゃ。

蛭田 ・ ・ ・ うん。分かってる。

緑が上手から三上の刀を持って入ってくる。

緑 付近には居なかった。

真屋 ありがと。お疲れ様。

緑 もう少し遠くの方探してこようか？

真昼 ううん。蛭田さんとも話したんだけど、二人は多分もう・・・。

緑 ・・・・そっか・・・。真昼、大丈夫？

真昼 うん。ちよつとショック大きいけど大丈夫。

緑 藤堂さんの時みたいに短くてもいいから、何か言って欲しかったね。

真昼 ・・・・うん・・・。

蛭田、ゆつくり緑に近付きながら、

蛭田 藤堂さんの時とはここを出る理由が全然違うだろバーカ。

真昼 蛭田さん？

蛭田 守先生達は死ぬ為に外へ出たんだぞ？そんな二人に挨拶されて何て返すんだよ。折角出した結論に水を指すような引き止める言葉しか出ないんじゃないかねーのか!？

緑 そんなつもりで言ったわけじゃ・・・。

蛭田 じゃあどんなつもりで言ったんだ？そんな薄っぺらい言葉で真昼ちゃんに優しさアピールか。

緑 蛭田さんどうしたんですか。

蛭田 名前を呼ぶな虫唾が走る!! お前は超が付くほどの疫病神だからな。

緑 (困惑して) 疫病神って・・・。

蛭田 お前がここに來てから災難続きじゃねえーか。全部の元凶はお前だろ!!

真昼 そんなことありません!!

蛭田 だって冷静に考えて見てよ!! タイミング的にどう考えてもそーじゃん!! 美咲ちゃんの愚猿化を発

端に、三上さんが逝つて、藤堂さんが出て行つて、守先生と和泉さんが死を選んで。どれもこれも
コイツがきたからだ。全部コイツのせいなんだよ!!

真昼 謝ってください!! いくら蛭田さんでも言つて良いことと悪いことがあります!! 緑に謝つてくださ

い!!

緑 真昼、僕は気にしてない。

真昼 でも緑が悪いわけじゃない!!

緑 いいんだ。僕が來たタイミングと被つてるのは事実だから。

蛭田 だよな!? 認めるよな、全部自分のせいだって!!

真昼 蛭田さん!!

蛭田 お前はいいよな!! 絶対愚猿化もしねーし、病気になることもないもん!! だってお前は、
やめてください!!

蛭田、言葉を止める。

真昼 ・・・・やめてください。

蛭田、少しよろけると両手で目を押さえ、小さくうめき声を上げる。

真昼
蛭田さん？

蛭田のうめき声、次第に大きくなり、その場に座り込む。

真昼
蛭田さん大丈夫ですか？

違うんだよ。俺、本当はこんなこと言いたいんじゃないよ。．．．違うんだよ！！ゴメン！！ゴメンな緑！！

緑
大丈夫です。僕は気にしてませんから！！

違うんだよ！！怒ってくれよ！！怒って俺を殴ってくれよ！！なあ、緑、殴ってくれよ！！気の済むまで殴って、そしたら．．．頼む。俺を許してくれ。

緑
許すって、蛭田さん。

蛭田
俺、もうダメなんだ。自分で分かるんだよ。どんどん体が壊れていつてる。目も耳も声も．．．どんどんダメになってる。

真昼
大丈夫ですよ！！守先生が用意してくれたお薬があります。治りますって！！それに軍に行けば．．．！軍が何してくれるんだよ！！．．．真昼ちゃん。軍に行ったら何もしゃくれないって。訳の分から

真昼
ない薬飲まされて実験されて使えなくなったら捨てられるだけだよ。軍なんてそんなもんだって。弱気になっちゃダメですよ!!

蛭田
俺ここに居たいんだ!!俺のことを何とも思っていない軍の奴等の前で死ぬよりも、憎まれても良いから俺のことを知ってる二人の前で死にたいんだ!!

緑
僕も真昼も憎んでなんかいません。

蛭田
本当か?本当に憎んでないんだな?

緑
はい。

蛭田
なら許すって言ってくれ。許すからここに居てもいいって言ってくれよ!!

緑
蛭田さん、ですから、

蛭田
頼むよ、緑。言ってくれよ。

緑、真昼を見る。真昼、頷く。

緑
・・許します。蛭田さんを許します。だからここに居てください。

蛭田、その言葉に心から安堵する。

蛭田
・・・手、握ってもらってもいいか?

真昼、緑、それぞれ蛭田の手を両手で握る。

蛭田 やっぱいいいな。柔らかくて、あつたかくて。人肌って良いよな。・・・二人に言ってるんだぞ。人肌

って。

緑 ありがとうございます。

蛭田 真昼ちゃんのこと、最後まで守れよな。

緑 分かりました。

蛭田 そーじゃねえーだろ!! お前はそーじゃねえーだろって!! 気持ちで答えろよ!! ・・・真昼ちゃんのこと、守れよな!!

緑 分かった!!

蛭田 (緑の返事に頷いた後) 真昼ちゃん。

真昼 はい。

蛭田 手、握ってくれてありがとう。

真昼 勿論握るんです!! でも、そんな言い方はダメです。まだまだ元気に畑を耕すんです。

蛭田、「にょほほほ」と笑う。

蛭田 真昼ちゅわんはきつびすいーなー。じゃ、今日は早く寝なきやだね。

蛭田、立ち上がり、二人の手を離す。

蛭田 ……じゃ、おやすみ。

蛭田、下手後方へ去ろうとする。真昼と緑、補助しようとするが蛭田、それを手で制する。

蛭田 大丈夫。まだ一人で歩ける。

蛭田、階段を上がり、去る直前に、

蛭田 真昼ちゃん。緑。ありがとう。

蛭田、下手後方に去る。

照明変化。（センターの緑にのみ明かり）

緑 蛭田さんが息を引き取ったのはそれから三日後の事でした。あれだけ精神的に不安定だった蛭田さ

んですが、死の直前はとても穏やかで、眠るように逝きました。僕は一人になってしまった真昼に別の施設へ行きたいか聞きましたが、真昼は静かに首を横に振りました。・・「畑があるから」と。

照明、薄暗い明かり。サスはそのまま。

真昼が元氣よく畑を耕している。

緑

意外というか、驚いたのが、一人になった真昼は笑顔を取り戻しました。小さな事でも大笑いし、毎日元氣に楽しく生きていました。決して無理してるわけでもなく、その純粋な笑顔は、僕にはまるで真昼が・・。

照明、明るくなる。（畑の明かり）

真昼

今日も良い天気なんです!! 頑張って畑を耕して、ここに千本のひまわりを咲かせるのです!!

緑

おー!!

真昼

じゃあ緑は肥料の準備をお願いね! その間私、こっちの残ってる部分耕しちゃうから!!

緑

真昼そっちは昨日・・。

真昼

え?

真昼、緑を見た後、これから耕そうと思っていた所を見る。

真昼

．．．もしかして．．．昨日耕した？

緑

．．．うん。

真昼

肥料もあげた？

緑

．．．うん。

真昼

そっか．．．。

真昼、一瞬考えてから。

真昼

いやー、ド忘れ!! そんな事もあるよね、うん!! こんだけ広いともうわけ分かんないもん!!

緑

だよね!!

真昼

じゃあ、後は種まきだね!! 私、種まきが一番好き!!

緑

分かる!!

真昼、下手後方の階段付近に移動。(そこに種を置いてある設定)

真昼

あれ? 種ってもうこんだけしかないんだ。

真昼、緑の方へ移動して、

真昼

じゃー、はい。これは緑の分。

真昼、緑に種を渡す。両手で受け取る緑。

真昼

じゃあ、蒔いちゃおうか。

真昼は下手側へ、緑は上手側へ移動。

客席側に近い方から蒔いていく。(種まきはマイム)

真昼

終わったー!!これで全部蒔いたのです!!・・・どのくらい蒔いたかな。結構な数いってるよね。

緑

1823粒。

真昼

え？

緑

蒔いた種の数。その内、真昼が948粒。僕が875粒。

真昼

本当に!?

緑

数えてたから。

真昼

よく覚えてられるね!!

緑

スゴイ!?

真昼

うん、スゴイ!! つかスゴ過ぎる!! ね、他に問題出してもいい?

緑

いいよ。

真昼

んーと、じゃーねー。初めて図書室に行った時に見せた本はなーんだ!!

緑

世界の植物図鑑、第八集。ひまわりのページは288ページの下段。

真昼

ああ、しまった!! 戻って確認したいけど、今言ったページ数を覚えてられる自信が無い。

緑

図書室で本を見る前にもう一度言おうか?

真昼

大丈夫。緑が嘘つくはずないもんね。・・・他にも覚えてるの?

緑

勿論。

真昼

私の好きな食べ物!!

緑

甘いモノ!! 特にチョコ!!

真昼

緑が本気出して畑を耕した時の私の感想!!

緑

基礎工事もたい!!

真昼

私がひまわりで好きなところ!!

緑

ぶつとい緑の茎!!

真昼

おお!!

真昼、拍手。照れる緑。真昼、笑顔から次第に真顔になり、拍手を止める。

真昼

そっか・・・そんなに詳細に覚えてるんだ・・・。何でも出来ちゃう緑だけど、忘れる事だけは出来ないんだね・・・。

緑、元気の無くなつた様子の真昼を見て、

緑

僕、何か悪い事言っちゃった？

真昼

ううん。大丈夫・・・。

緑、空気を変えようと明るく、

緑

あ、そうだ!! ひまわりの種、もっと手に入れようよ!! ほら、以前行ったビルの近くにホームセンターあったの見たから。あそこならたくさん種があるんじゃない!? ね!? もっと耕してもっと植えようよ!!

真昼

ホームセンター？

緑

うん。

真昼

本当に・・・よく覚えてるんだね。

真昼、寂しそうに笑った後、少しよろめく。が、なんとか自分で踏みとどまる。緑、心配して近づこうとするが、真昼、手でそれを制する。

緑 真昼、今日はもう戻ろう？

真昼 大丈夫。もうちょっとだけ・・・。

真昼、大きく深呼吸をしてから、

真昼 緑！！ゲームしない？

緑 (真昼のことを心配しつつ) ゲーム？

真昼 そ、ゲーム。ね！ゲームして遊ぼう！！

緑 (心配してる気持ちを押し殺して元気よく)・・・いいね、遊ぼう！！どんなゲーム？

真昼 聞きたい？

緑 聞きたい！！

真昼 名付けて！！絶対服従ゲーム！！

緑 おお！なんか凄そう！！

真昼 私が言うことは絶対に何でも聞くこと！！

緑 分かった!!

真昼 ちゃんと守れたらご褒美!! 守れなかったら罰ゲームだからね!!

緑 大丈夫!! 僕は真昼の言うことなら絶対に従うから!!

真昼 だよね!!

緑 任せて!!

真昼 じゃーねー・・・。

真昼、センターよりもやや上手なりに鍬の先端で客席側から舞台奥に向かって線を引く。鍬はそのまま下手階段下に置く。

線より上手側に緑。下手側に真昼。

真昼 今から私が「良し」って言うまで、この線からこつちに来たらダメだからね。

緑 ……え?

真昼 それが絶対に守らなきゃいけない命令。分かった?

緑 う、うん……。ねえ、真昼。

緑が呼びかけた瞬間、真昼、胸を押さえて苦しみ出す。

緑 真昼？・・・どうしたの？
真昼 ・・・あのね。・・・あのさ・・・。ごめん。私、限界みたい。

真昼、その場に座り込む。

緑 真昼!!

緑、心配して真昼のところへ行こうとするが、線から先へ進めない。

真昼 もうちょっと頑張れるかなって思ったんだけど・・・。

緑 真昼、そっちに行かせて!!施設まで僕がおぶって行く!!

真昼 でも、種まきが全部終わった後で良かった。

緑 真昼!!

真昼 ありがとね。最後まで手伝ってくれて。

緑 そっちに行かせて!!

緑、必死に線を超えようとするが、出来ない。

真昼

ダメ。ゲーム始めたばかりだよ？

緑

ゲームはおしまい!!お願いだからそっちに行かせて!!

真昼

うーんとね、・・・やっぱりダメ。

緑

どうして!?

真昼

今、緑に触れられたら、私きつと泣いちゃう。

緑

・・・え？

真昼

私ね、これまで一度も泣いた事ないんだ。どんなに悲しい事があっても絶対に堪えてきたの。それが私の、この世界に対しての意地。

緑

泣いたっていいじゃん!!真昼は人間なんだよ。どんな感情だって我慢することはない!!だから!!うん。私も最近そう思い始めてた。笑いたい時に笑って、怒りたい時に怒って。・・・泣きたい時に

真昼

泣く。緑とだったらきつと、そうやって過ごせるんだろうなって。

緑

そうだよ。僕になら何も我慢する事ない!!僕が全部受け止める。受け入れる!!だから真昼!!でも緑に残しちゃうから。

緑

・・・何を？

真昼

私との最後の会話が、泣き顔だったっていう記憶。

緑

何でそんな事を言うの?どうして最後なんて!!お願いだから!!真昼、お願いだからそっちに行かせて!!命令を解いて!!真昼!!

真昼、下を向いて緑から視線を外す。

真昼

ごめん。ごめんね。．．．でも緑の記憶の中では全部笑顔の私で居たいんだ。

緑 真昼!!

真昼、ポケットから薬を取り出す。

真昼

それとね、緑の前で愚猿になるのも嫌。

真昼、再び緑を見る。

緑

真昼、その目は．．．。

真昼

うん．．．。だからちゃんとしなきゃ。．．．ねえ、緑。

緑 何？

真昼

ここ．．．ひまわり咲くかな？

緑

咲くよ!! 咲くに決まってる!! 絶対咲くから!! こんな荒れた地面じゃなくて、緑と黄色が辺り一面を覆いつくすくらい咲くから!! 僕が絶対咲かせるから!!

真昼

楽しみなんです。

緑
真昼・・・。

緑、精一杯真昼の方へ手を伸ばす。線は越えられない。真昼、薬を見る。

真昼
(薬を見たまま)・・・楽しみなんです。

真昼、薬を飲む・・・そして、緑を見て笑顔になる。

その笑顔に必死に進もうとしていた緑が止まる。

真昼、ゆっくり目を閉じる。そのまま眠るように倒れ、動かなくなる。

静寂。緑、ゆっくり足を前へ出す。線を一步越える。

「越えられた」という事実が胸が苦しくなる緑。一歩ずつ真昼に近づく。

緑、真昼の近くで膝をつく。両手は両膝を握りしめる。

緑
真昼・・・「褒美は？僕、ちゃんと命令守ったよ？

動かない真昼。

緑
もしかしてまだゲーム続いてた？じゃあ僕の負けだ・・・罰ゲームしなきゃ。罰ゲームは何？・・・

真昼。・・・罰ゲーム、何すればいいか言つてよ。

動かない真昼。緑、心の中で真昼がもう動かない事を受け入れる。

緑
・・・大丈夫。任せて。必ずこの辺り一面にひまわりを咲かせてみせる。・・・だから皆と・・・。

緑、下を向く。

上手後方から藤堂、三上、蛭田、美咲、守、和泉が入ってくる。

緑
皆と仲良く待つて。約束が守れたら僕も行くから。それまで、おやすみ、真昼。

照明変化。(緑の想像の世界)

上手後方とセンターのみにサス。

真昼がゆっくりと立ち上がる。

真昼
緑。ありがとう。

上手後方の役者がマイムで真昼を呼ぶ。真昼、上手後方へ移動し、緑の方を向いて、

真昼

待ってるね!!

上手後方の役者、上手後方に去る。同時にサスも消える。

舞台上はセンターサスのみ。その中に緑。ゆっくり立ち上がる。

緑

これが僕の頭の中にある真昼との思い出の全てです。僕はまだここにいて、ひまわりの種を植え続けています。種がなくなると日本中を探して見つけては植え続けました。その数はもう僕でも把握しきれません。時間の経過と共に広大になるひまわり畑ですが、・・・まだ一つの新芽も生える事なく、変わらない風景が僕の感覚を麻痺させていきます。それでも頑張れているのはきっと、僕の記憶の真昼がずっといつまでも笑顔だから。

舞台の明かりがつく。緑、鍬を持つ。

緑

さあーて!! 今日でも相変わらず曇ってるけれども!! 頑張って耕しますか!! おい太陽!! お前も頑張れ!!

緑、一人で畑を耕す。

緑 「楽しみなんです!!」「楽しみなんです!!」「楽しみなんです!!」「楽しみなんです!!」

緑、「楽しみなんです!!」の度に土を耕していく。

少し畑を耕したところで、上手、下手、上手後方、下手後方から愚猿が入ってくる。
手を止め、警戒態勢になる緑。

緑 また新しい群れか・・・。

緑、鋤を置いて三上の刀を手にする。

緑 申し訳ないですけど、ここはある人と約束している大切な場所なんです。譲るわけには・・・。

緑のセリフの途中で愚猿が襲ってくる。緑、それを避ける。

緑 右手の動きを確認する。

緑 動きが鈍くなったとはいえ、あなた達に負けるような僕じゃありません。・・・僕には・・・果たさなきやいけない約束があるんだ!!

緑と愚猿との殺陣。動きは大きく分かりやすいもので良い。

緑、殺陣の途中で舞台センター付近に何かを見つける素振り。

一瞬、気を取られて攻撃を受けてしまう。が、それでもセンターの一点を見つめる緑。驚きの表情から必死の表情に変わる。

大声をあげながら刀を振り、センター付近にいる愚猿を遠ざける。

緑、そこから一步も動かない。愚猿の攻撃を受け止めきれなくなった緑、何かを庇うようにしてうずくまる。愚猿が一斉に攻撃。

（愚猿の攻撃の間、担当する愚猿役は緑に「新芽」を渡す。緑は新芽を受け取ったらそのままお腹に抱える。）

愚猿、大声を上げて四方に去っていく。センターでうずくまっている緑。

顔を上げて周りに愚猿がいないことを確認。安堵する。ゆっくり上半身を起こす。舞台上には新芽。

・・・これが・・・緑。

緑、新芽の周りを手で覆う。（決して触れない事。）

何で……。初めて見るのに何でこんなに懐かしいんだろう。何でこんなに愛おしいんだろう。

緑、新芽に語りかける。

緑
初めまして。僕の名前は漢字の緑と書いて「りよく」。良い名前でしょ。君にこの名前をあげるよ。

ここにはこれから千本のひまわりが咲くんだ。僕の代わりに見守って欲しい。．．．頼めるかな？

緑、少し笑いながらうなずくと、ゆっくり倒れる。

緑
皆．．．真昼．．．もうすぐ．．．ひまわりが咲くよ．．．。

照明変化。（緑の頭の中の世界）

上手後方から、藤堂、三上、蛭田。下手後方から守、和泉、美咲。

上手と下手から愚猿役のキャストが入ってくる。（仮面は外して、爪もない）

役者は全員大量のひまわりを抱えている。

最後に真昼が上手後方から上段のセンターへ。真昼、緑を見て笑顔になり、

真昼
もう、緑!! いい加減に．．．起きなさい!!

真昼の声にブンツという起動音。緑の体からキューーンという音がする。

舞台上に立っている役者は全員笑顔。

（可能であれば、壁や幕全てにひまわりの絵を描いた布をくくりつけておいて、舞台上がひまわりだらけになるようにする。）

— 幕 —